

「日本のこころの源流」を探り
「世界への日本の夢」を共創する

討議用参考資料（第一版）

令和2年4月1日

日本のこころの源流を探る研究会（自啓共創塾）

コーディネータ・事務局

はじめに

世界では、米中等覇権大国の対立、中東・アフリカ、中南米における紛争、ヨーロッパでの民族対立の拡大、各国内での社会や政治の分断、世界中（日本を含む）での格差の拡大など、とくに最近、分断と対立がすすみ、人々のところには不安が増えています。

これからの人類社会には、このような不安を乗り越える希望のビジョンが必要ですが、世界を見わたしてみると、そのヒントは日本のところの中にあるのではないのでしょうか。

しかし、これから社会人となる学生、すでに社会人となっている企業人や教育関係者等の多くは、第二次大戦後の家族制度の変化・核家族化、学校教育の混迷など、生活・社会環境の構造的な変化もあって、世代間の価値観の継承の機会が失われたため、人間としての真の生き方を学ぶ機会が少なくなり、自信をもって社会に立ち向かうところの準備が十分に整えられない環境にあるように感じます。

自己肯定感を養うためには、楽しみながら学びアウトプットで自信をつけさせるPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）等の各種教育手法の導入も必要ですが、社会や世界に立ち向かう真の自信は、根源的には、やはり世代を超えて継承されるべき民族の文化や人類の智慧を身体全体で習得し、自らのアイデンティティに確信をもつことでしか生まれられないのではないのでしょうか？

その必要性を直観する若い世代からは、歴史的に築かれてきた「日本のところ」※の根源を学び直したいというニーズが、澎湃として高まりつつあると感じられます。

※「日本のところ」とは、小我を離れ大我（真我）を知るところ（岡潔）。小さな自我を離れ、周りの環境や人間・社会・世界と一体不可分の自己を知る大きなところ、日本の長い歴史と文化に根差すものだが、人類的普遍性を持ち、世界中の人々と共鳴し合い、共有できるもの。

これに対応する社会や学校での教育・研修のカリキュラムは十分開発されておらず、リカレント教育、リベラルアーツ教育、道徳教育の一環として位置付け、日本社会としてのSDGs※実現の基本ビジョンを考える機会にもなることを期待して、試みの教材案検討の出発点とすべく、たたき台（試案）として作成してみました。

※SDGsとは、「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称であり、2015年に国連で開かれたサミットの中で世界のリーダーによって決められた、国際社会の共通目標です。

一応、毎回2時間程度、15回の研究会方式の研修を行う前提で、その際の基本テキストとなりうるように各回のテーマを構成しました。（次の目次をご覧ください）

研修は、参加者の主体的・自主的な研究と学習（体験学習を含む）の場とするため、この教材を基本に、坐禅体験や現地視察も加え、コーディネータを交えた意見交換に参加することで、各人なりの自己啓発に資することを目的に実施されることが望まれます。参加者の「自調自考」の機会となることを目指し、この教材もそのためのキッカケ（考えを深める機会）として利用されることを期待したものです。

この資料について

この資料は、時間をかけて読んで理解することを求めたり、知識を体系的に学んだりするために作られたものではありません。堅苦しく構えず、気楽に眺め、飛ばし読みをしてください。そして、何かご自身にとってヒントになるものがあるか、大きく直観力で感じ、また考えてみてください。

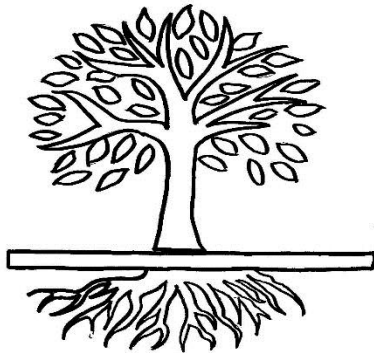
自身を葉が茂る大木としてイメージしてみましょう。

「社会や生活、あるいは文化や芸術の実践活動」が、大木の**葉**（葉、花、実）であるとするなら、それを支える「知識や技」が**枝**であり、それらすべてを支える「こころ」が**幹**に例えられます。

葉が繁茂し、花や実が大きく開き、結実するためには、**枝**がしっかり伸びる必要があります、さらに大事なのは枝を支える**幹**が、地中深く**根**をはってそこから多くの養分を吸い上げ、たくたくましく育つ必要があります。

地中から養分を吸い上げ、「こころ」が**幹**として急速に育つ幼児から大人になるまでの若い時期に、過去の人類や日本人の祖先たちが営々と練り上げてきた「こころの養分」を、目に見えない地下の源流にどんとどんと**根**を伸ばして分け入って探り、何かをつかみ取って自分のこころ（**幹**）に吸いあげることができれば、こころは定まり（立志）、私達は「真の自信」を持って世の中に乗り出して行けるのではないのでしょうか。

大木の繁茂を支えるのは**幹**（こころ）であり、たく育つためには、地下にあって目に見えない源流の養分が重要であること、この資料がその気づきのキッカケになれば幸いです。



目 次

- I 世界が期待する日本のころとは
- II 日本のころを育んだ源流に何があるか
(神・仏・儒の習合、禅・Zen、和漢洋の思想について)
- III 地球環境の保全・人類の共生を支える日本のころ
(神道について)
- IV 政治思想と社会倫理の元にある日本のころ
(孔孟思想と陽明学等日本の儒教について)
- V 日常の生活習慣が構築する日本のころ
(マンガ、働き方、礼、女性活躍)
- VI 眞のサムライとは？ 剣道・弓道・合気道に見る武士道のころ
- VII 明治維新の立役者の生きざまを支えたもの
(西郷隆盛・勝海舟・山岡鉄舟)
- VIII 聖徳太子の和の精神から世界・人類共生への日本のころを考える
- IX 匠の道、茶道、書道、美術、文学等から日本のころを探る
- X 幕末から今日につながる実学・平等・人権・分権の思想
- VI 世界に貢献する日本型産業の精神の源
(公益資本主義の世界展開、石田梅岩、渋沢栄一等)
- VII グローバル化時代における日本語の大切さ
- VIII 世界に求められる日本型リベラルアーツとは
- XIV 人工知能 (AI) の時代と人間力
- XV これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢 (ビジョン)

I 世界が期待する日本のころとは

日本のころは、これまでも世界・人類に大きな貢献を果たしてきた実績がある。そのころの内容・真髄を探るためには、言葉（論理）による解説だけでは不十分で、体験（感性による理解、直覚）が必要です。頭脳だけに頼ることなく、現地現物で五感を総動員し、全身全霊によって理解することが不可欠。世界のための日本のころセンターが、無念夢想で無意識の世界を体験する坐禅を重視し、また学びや研修に際して、坐学だけでなくアウトドアで自然や社会体験から学ぶことを重視しているのもこのため。

そして、学びのキッカケとしては、色々な角度から世界や社会の現実とその成立（歴史等）を知ることが必要だと思われる。

日本のころを学ぶにあたり、まずは日本の外（世界）からの視点が、私たちに気づきの出発点を与えてくれる。

1. 海外からの観察（その1）

最初に、日本に住む人々についての海外からの視点による観察記は、歴史上色々あるが、まずは次の3例に絞って、そこから日本のころの在りかについて、少しく考えてみたい。

(1) 戦国時代の日本人についての宣教師たちの見方

16世紀の戦国時代、ヨーロッパの宣教師たちは日本に渡来し、多くの日本人の観察記録を残している。なかでもフランシスコ・ザビエルは日本人の精神性の高さや教育水準の高さを賞賛し、ルイス・フロイスは「宣教師たちが食べ物を手でつかんでいるのに、日本人は子供の時から二本の棒（箸）を使う」と驚嘆し、イエズス会でアフリカ、インド、マレー、中国、日本までの広汎な地域をカバーする巡察師であったヴァリニャーノは、日本人の礼儀作法を高く評価して、日本の4人の少年による天正遣欧使節団を派遣した。4人は、1年8カ月をヨーロッパ各地で滞在し、ローマ教皇グレゴリー13世の格別の歓迎が端緒となって、訪問する各都市で高貴な少年達の立ち居振る舞いが高く評価され、センセーションを巻き起こしたという。

(2) 幕末の日本人のころを訪日外国人はどう見たか？

渡辺京二著「逝きし世の面影」には、多くの観察者の証言がある。感心したのは、景観の美しさだけでなく、子供たちの自由なふるまい、女たちの屈託のない素振りや姿、日用雑器やおもちゃや土産物の細工のすばらしさにも、多くの外国人が目を見張った。

「デイリー・テレグラフ」の主筆エドウィン・アーノルドは、「日本の最も貧しい家庭でさえ、醜いものは皆無だ。お櫃（ひつ）から簪（かんざし）にいたるまで、すべての家庭用品や個人用品は、多かれ少なかれ美しく、うつりがよい」と述べた。

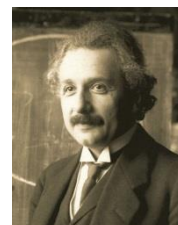
フランス海軍の兵卒として慶応2年に来日したスエンソンは、日本の家が「いつも

戸をあけっぱなしにしている」ことにびっくりし、女性たちがあけっぴろげであることとともに、その開放感がいったいどこからくるのかを考えこんだ。イギリス公使館の書記官だったミットフォードは、そうした日本を「おとぎの国」「妖精の国」とよぶしかないとしている。スイスの遣日使節団長だったアンベールは、日本が何百年にもわたって、質素でありながらつねに生活の魅力を満喫していることに驚くとともに感銘をうけている。ルドルフ・リンダウの『スイス領事の見た幕末日本』には、「何もすることもなく、何もしていない人々は、日本では数多い。かれらは火鉢のまわりにうづくまって、お茶を飲み、小さなキセルを吸い、満足な表情で話をしたり、聞いたりしている。そこには日本人のやさしい気質と丁寧な人づきあいがあらわれている」とある。

熊本に入って徳富蘇峰らに影響をあたえた英語教師のリロイ・ジェーンズは、日本では乞食でさえ節度あるふるまいをしていると驚いた。大森貝塚の発見でも知られるエドワード・モースは、いつもそこいらに置きっ放しにしていた自分の持ち物や小銭が一度も盗まれなかったことを、何度も書いている。日本について10冊以上もの感想や記録を綴ったウィリアム・グリフィス（理化学教師として越前藩に招かれた）は、「きっと日本人は2世紀半というもの、主な仕事は遊びにしていたのではないでしょうか」と半分冗談まじりで書いた。（「松岡正剛の千夜千冊」より）

(3) 明治期以降では、アインシュタインの見方

アルバート・アインシュタインは各地で講演を続け、京都での講演後、京都御所を訪問し、即位の間に約40人の中国の政治家の肖像画があったことを注目し、それについては中国から実のある文化を日本にもたらしたことが評価されたためであると説明を受けた。



（以下アインシュタインが1922年11月日本を訪問したときの記述（『アインシュタイン日本で相対性理論を語る』）より）

「外国の学者に対するこの尊敬の念は、今日もなお、日本人のなかにある。ドイツで学んだ多くの日本人の、ドイツ人学者への尊敬には胸を打たれる。さらには細菌学者コッホを記念するために、一つ寺が建立されなければならないようだ。」

「嫌味もなく、また疑い深くもなく、人を真剣に高く評価する態度が日本人の特色である。彼ら以外にこれほど純粋な人間の心をもつ人はどこにもいない。この国を愛し、尊敬すべきである。」

日本滞在中、講演と観光の合間を縫って、アインシュタインは多くの日本人と会った。長岡半太郎や北里柴三郎ら日本を代表する科学者、学生、ジャーナリスト、そして一般家庭の訪問まで。そして「微笑みの背後に隠されている感情」が何かに気がついて次のように述べている。

「我がドイツでは、教育というものはすべて、個人間の生存競争が至極とうぜんのこ

と思う方向にみごとに向けられています。とくに都会では、すさまじい個人主義、向こう見ずな競争、獲得しうる多くのぜいたくや喜びをつかみとるための熾烈な闘いがあるのです。日本には、われわれの国よりも、人と人とがもっと容易に親しくなれるひとつの理由があります。それは、みずからの感情や憎悪をあらわにしないで、どんな状況下でも落ち着いて、ことをそのままに保とうとするといった日本特有の伝統があるのです。ですから、性格上おたがいに合わないような人たちであっても、一つ屋根の下に住んでも、厄介な軋轢や争いにならないで同居していることができるのです。この点で、ヨーロッパ人がひじょうに不思議に思っていた日本人の微笑みの深い意味が私には見えました。」

「個人の表情を抑えてしまうこのやり方が、心の内にある個人みずからを抑えてしまうことになるのでしょうか？ 私にはそうは思えません。この伝統が発達してきたのは、この国の人に特有のやさしさや、ヨーロッパ人よりもずっと優れていると思われる、同情心の強さゆえであります。」

「この国に由来するすべてのものは、愛らしく、朗らかであり、自然を通じてあたえられたものと密接に結びついています。かわいらしいのは、小さな緑の島々や、丘陵の景色、樹木、入念に分けられた小さな一区画、そしてもっとも入念に耕された田畑、とくにそのそばに建っている小さな家屋、そして最後に日本人みずからの言葉、その動作、その衣服、そして人びとが使用しているあらゆる家具等々。…どの小さな個々の物にも、そこには意味と役割とがあります。そのうえ、礼儀正しい人びとの絵のように美しい笑顔、お辞儀、座っている姿にはただただ驚くばかりです。しかし、真似することはきません。」

アインシュタインはこう警告している。

「西洋と出会う以前に日本人が本来もっている、生活の芸術化、個人に必要な謙虚さと質素さ、日本人の純粹で静かな心、それらのすべてを純粹に保って忘れずにいて欲しいものです。」

科学技術の進展から、人類は核兵器を持ち、地球環境を危機に陥れてきた。アインシュタインが賛嘆した人間同士の和、自然との和を大切にする日本人の伝統的な生き方は、いまや全世界が必要としているものかも知れない。

その他にも、例えば

ブルーノ・タウト（1880～1938）

「日本美の再発見」などの著者で、ドイツの建築家

小泉八雲（1850～1904）

ギリシャ生まれの新聞記者、紀行文作家、随筆家、小説家、日本研究家、日本民俗学者。ラフカディオ・ハーン

エリザ・シドモア（1856～1928）

日本に関する記事や著作の多い親日家、親日家であり、ワシントン D.C. のポトマック河畔に桜並木を作ることを提案

2. 海外からの観察（その2）

続いて、日本に長らく生活し、学校で学び、世界との関係で事業を続けられる方々から、今日の日本人について、日本のこころの本質に迫るお話を聞いてみたい。

(1) 「ホズミ・スピリット」の真髓

戦後の日本で、アジア・アフリカなど発展途上国の人達のハートを捉えた「ホズミ・スピリット」とは？

1974 年急激な日本の経済進出に反発してタイやインドネシアで起きた学生中心の反日運動は、東南アジアを訪問した当時の田中角栄総理に衝撃を与え、日本の各界が対策に迫られる事態となった。その解決に官民の要請を受けて乗り出したのが穂積五一であった。戦後日本の産業はアジアで反日の嵐を経験した。その中心には元日本留学生達がいる、彼らは自己利益優先の日本の経済進出に反発し、日本の経済協力も拒絶した。日本政府は困って穂積五一を担ぎ出し、元留学生達とひざ詰めで話し合ってもらった。そこで、わかったのが彼らの本音であった。学生たちの反日の主張は、「日本はタイのためと言いながら、経済進出の実態を見るとその本心は自国の発展だけではないか」、「日本の経済協力もこのままでは受けられない」と言うもの。「経済協力は、南のためと日本人はいふが、それは日本の利益のためである。援助した日本は富み、それを受けた南は貧しいままである。」というのが彼らの主張だと穂積は語った。（内観録 P 372）

戦後の一部日本人のこころの浅さを見透かされたと感じた穂積は、タイ側の若者やリーダー（大蔵大臣のソンマイ氏ら）と会談を重ね、また日本の官民に働きかけて、タイ人による主体的な発展努力を無償で支援する日本側の支援体制を構築する。

具体的には、タイ側が泰日経済技術振興協会（TPA）を創設するに際し、日本側官民は（社）日タイ経済協力協会を創設して、見返りを一切求めずにタイの会館の建設を支援することとした。同協会の理事長には、両国の関係者の強い要請があつて穂積が就任した。

そこで打ち出された穂積の方針が、「ホズミ・スピリット」としてタイへの産業人材育成支援の基本原則となり、タイ側から（アジア全体からも）高く賞賛されるものとなった。

支援のあり方等は、相手国民の主体性を常に尊重する。金は出しても口は出さない。タイのためと言いながら、自らを利することが主目的になっていないか常に反省する。

この考えは今日まで貫かれており、その証左として TNI の校庭には穂積五一の銅像が設置されている。

この穂積の考えの基本には、坐禅体験から得られた無我のこころ、即ち自己に拘る小我ではなく、天地万物我と同根という大我のこころがあつたのではないか。日本人でありながら「日本人を離れる」無我の精神、それが直観的に世界の人に理解されたのであろう。

このことは、穂積が、下記（※）のような張学良と洪沢栄一のエピソードを述べている

(内観録P89) ことから理解できるのではないか？

※張学良と洪沢栄一の逸話

昭和4、5年の満州建国以前のこと、張作霖の爆死事件(昭和3年)のあと日本を不倶戴天の敵としていた張学良が、一夜こともあろうか日本人である洪沢栄一の令息正雄氏を自宅に招いて歓待したことがある。その理由を張学良は概略次のように説明したという。「自分は若いころから日本に留学したりして多くの日本人の指導を受けた。これらの人は腹の底のどこかに必ず日本というものが潜んでいて、直接間接に日本のためにということを忘れた人は一人もなかった。ただ一人の例外が、洪沢栄一翁であった。翁は日本という立場を離れて、いつも純粋に私の立場に立って判断し、人間として私の進むべき道を示しておられた。このお礼をしたいと思いながら、ついにその機会を失っているうちに、貴方が満州にこられると聞いたのでお招きした次第である。」

今では、日本とタイ(アジア)との間には、経済的にもウィンウィンの関係にあるが、日本側の官民の間で、タイ(アジア)側に記憶されている穂積五一の精神が継承されているであろうか、次第に記憶から消えてしまう恐れはないのだろうか。

注) 穂積五一(1902~1982)

東京帝国大学卒、学生時代に上杉慎吉教授に師事、上杉、岸の後七生社の学生寮「至軒寮(後の「新星学寮」)を継承、戦後アジアからの留学生を支援し、アジア留学生の父と言われた。(財)アジア学生文化協会及び(財)海外技術者研修協会の初代理事長



◆ パイシット・ピパタナクンさん(東大法学部卒 元タイ国上院議員、国会下院事務総長)からのコメント

「戦後驚異的な復興を遂げた日本からの輸出攻勢により、タイには日本製品が溢れ、貿易不均衡や地場産業不振などの経済問題が深刻化しました。若者を中心に反日感情が高まる中「日本人の本当の心を理解してもらう必要がある」と穂積先生は考え、人間同士の交流の場としてのTPA設立に尽力されました。支援に際して穂積先生は「カネは出すが口は出さない」という方針を貫かれました。相手を信じ抜き、その思いにこたえるべく必要な援助は惜しまないというその姿勢が、TPAだけでなくその後の日タイ関係の発展に大きく貢献したことを、私たちは忘れてはならないと思います。」

◆ スポン・チャユサハキットさん(東大工学部(電気)卒、バンコク高速道路社長、バンコクメトロ社副会長、TPA会長を経て泰日工業大学理事長)からのコメント

「穂積先生は、当時通産省の『日タイ協力事業』の調査・相談で2回訪タイされています。その事業の(タイ側機関・TPA)会長の話も、数人の著名な日本人やタイ人が推薦されましたが、どうも穂積先生はあまり賛成しなかったようです。そして最後の最後にソムマイさん(タイ産業金融公社総裁、元大蔵大臣。慶応義塾大学出身)の名前が出てきたわけです。しかしソムマイさんが大蔵副大臣に任命されたため、



初代会長はソマイさんに代わりワーリーさん(タイ産業金融公社総裁、東京商科大)が就任しました。先生は東京で、僕だけでなく研修生たちにも『日本で勉強して国に帰ったら頑張っ、日本に負けないように発展してください』と。南北問題が解決しないと世界が安定しない。こういう背景まで深く考え『皆さんが頑張っ、国がレベルアップすれば経済も発展し、全世界が早く平和になる』と。なるほど先生の言うことはものすごく意味が深いなあと思いました。』

- ◆ プラユーン・シオワッタナさん(大阪大学大学院修士課程(電気)修了、タイ国立科学技術開発機構(NSTDA)副所長、TPAでは事務局長、専務理事、を経て会長、泰日工業大学(TNI)創設に参画、タイ国立計量研究所所長・現顧問)のコメント

「私と穂積先生との出会いは、1974年大阪大学の修士課程を終えて研修を行うために、東京に宿泊した時です。ある日、アジア学生文化会館の玄関で新聞を読んでいたところ、穂積先生が通りかかり、先生に挨拶すると私の事を色々と尋ねられました。そして、私が近いうちにタイに帰るとお分かりになると、大卒間もない私にタイ日技術振興協会(TPA)の設立にかかわる政治経済的背景とその目的を、時間をかけて丁寧に説明して下さいました。そして協力の大原則は“お金は出すが、口は出さない”、つまり、タイ側の自主性を尊重することだ、と話しました。最後に先生から『タイに戻ったら是非このタイ日経済技術協会と言う場を利用してタイ社会に大いに貢献してほしい』と勧めて頂きました。」

(2) モンテ・カセム氏の活動の紹介と、お話し。

スリランカからの元日本留学生モンテ・カセムさん(至善館大学院大学学長、元立命館アジア太平洋大学学長)は、長く日本に滞在し、世界と日本を繋ぐ色々なプロジェクトに関与されている。その具体的な活動から、私達がこれから何をどのように為すべきかのヒントが、見えてくる。

(10年以上前に伺ったモンテ・カセムさんと数人のスリランカ留学生OBからの話)

彼らは母国スリランカの発展に日本留学の成果を生かすだけでなく、むしろインターネットの活用も念頭において世界と日本を繋ぐ役割が果たせないかという構想を抱き、活動を模索していた。

リーダーのカセムさんは、自ら主催者(実行委員会会長)となって「外国人の見る日本」(Global Voices from Japan)コラムコンテストを実施し、2010年5月にはその第一回の表彰式が行われた。その目的は、当時13万人の滞日外国人留学生と数十万人に達する日本留学経験者らの声に耳を傾け、彼らの目を通して見る日本のありのままの姿を世界に伝えるとともに、日本と世界の相互理解を促進することだと言う。ウェブサイトで世界に呼び掛け、応募は世界44の国と地域から453点が集まった由である。最終選考に残った入選作を含む25点のコラムがウェブサイトに日、英、中、韓の多言語で掲載され、世界に発信された。

(3) その他、世界からの元日本留学生、海外青年協力隊OBの人達からのメッセージなど

II 日本のこころを育んだ源流に何があるか

(神・仏・儒の習合、禅・Zen、和漢洋の思想について)

1. 日本のこころの源流にあるもの

例えば、**二宮尊徳**※は、成田新勝寺での断食（坐禅）修行によって、利害の異なる武士をも味方にする「一円観」を会得し、自分のこころの基本は「神・儒・仏正味一粒丸」であると述べている。

二宮は自らの言葉で、「神道は開国の道であり、儒学は治国の道であり、仏教は治心の道である」とし、「高尚を尊ばず卑近をいとわず、この三道の正味ばかりを取って正味一粒丸と名づけた」と言っている。即ち、神道、儒教、仏教の中から実際生活に必要な要素（正味）を取り出し、これを混和して一体の丸薬として服用すれば道が開けると述べている。

(二宮翁夜話・231頁・意識)

※ 二宮尊徳（金次郎）

二宮尊徳（1787～1856）は、江戸時代後期の経世家、農政家、思想家で、江戸末期の関東一円（小田原藩桜町領を始め、矢田部、下館、小田原、相馬、日光神領等）の広汎な数多くの農村の復興事業を逐一成功させた。明治政府は幕府時代の業績を発展させなかったが、民間の運動として残り、後述する渋沢栄一などの日本の資本主義発展に繋がっていく。内村鑑三が取り上げた「代表的日本人」の5人の内の1人。



尊徳の主張は、**至誠**（誠を尽くして）、**勤勞**（まじめに働き）、**分度**（身の丈に応じた収支計画を立てて）、**推譲**（譲って損なく奪って益なし）の四原則のみ。

開発には確実に実施できると確信できる内容の長期計画は必要で、それに基づき、着実に実績を上げて究極の目標を達成することが可能となる。分度（収支の基本システム）を元に、例えば福島県の旧相馬藩では60年計画が立てられ、10年ごとに着実に実施された。今どきの官民の中期計画なるものが、基本構造を変えることなく絵にかいた餅で終わるのは全く違う。

手法としては、現地現物の実践智を重視し（坐学の観想智だけではダメ）、**積小以大**（着実に、勤勉に、小さいことから始め、急がず我慢強く目的を達成する＝急げば大事乱れる）です。遺言「つつしめや少子、速やかならんことを欲するなかれ。速やかならんと欲すれば、大事乱る。勤めよや少子、倦むことなかれ。」

もう一つ、尊徳の素晴らしさは、推譲に関係するその「こころ」、敵を味方にする人間観にある。自ら「神儒仏一粒丸」と呼び、尊徳手法で不利を被る武士階級の抵抗を、最終的には「敵を味方にするこころ」で乗り切った。成田新勝寺での断食修行（阿字観の坐禅）が明けて、一円観ですべての人を味方にする境地を得た。

尊徳の考えは、今日の日本の産業や社会のベースとして繋がっている。

(1) 日本的集団社会の本質に繋がる分度の考え＝年貢は支配者がとるものではなく、農

民が収めるもの。集団事業の再投資資金として自らに帰ってくるもの。日本の労使関係は資本が人を支配する欧米のそれに比べ、より働く側の人間の主体性を尊重している面がある。

- (2) 「底のない桶に水を注ぐようなモノ」とは分度のない改革への金次郎のコメント＝教育再生に「予算を」という声に対する某教育再生会議委員のコメントもあった。教育再生には、現状の制度のまま単純に予算を増やすだけでなく、教育界の分度、制度の枠組みの再設計が最初に必要と思われる。

- (3) 二宮の改革に見る重要なポイント

トップ（藩主、家老）のリーダーシップ、ボトムアップの農民のやる気等は当然であるが、

- ① 長期基本計画（分度の目標達成の）が特に重要 過去の収入を調べ実力ベースの収入計画と支出計画を決める。それ以上の収入が想定される場合は、過去の負債軽減と再投資資金に向ける。
- ② 実施計画の最初の着手は、効果が上がる場所、後に続く模範となりうる事業となる場所、その地域の農民のやる気が感じられる場所から 山の中の貧村（草野村）ではなく、問題が多いお手並み拝見的地域（大井村、塚原村）でもなく、農民の希望が強い村（成田村、坪田村）から
- ③ その上で策定された、ゴール達成までの改革の全体計画が必要（計画の長さは問わない） 5年程度の昨今の官民の中期計画は、中途半端で、かつ内容が主観的・希望的観測に依存するものに過ぎない 桜町は一期 10年、二期 5年の 15年計画 相馬藩は一期 10年で六期まで 60年の復興事業計画

- (4) 中国も今儒教ブームが起きつつあるが、その中国から小田原まで毎年留学生が来ているのは何故か？国際尊徳学会があつて、日本人より世界の人がその素晴らしさを知っている。

神道には共同体としての宗教（哲学）、仏教には個人としての宗教（哲学）という側面があり、儒教には政治倫理や統治の要諦（政治哲学・道徳）という側面がある。仏教では坐禅と念仏が鎌倉時代の宗教改革で士農工商万民に普及し、儒教では官学としての朱子学とは別に、孔孟思想（古学）と陽明学が江戸期から武士商人を中心に万民に普及した。

日本のところは、この神・儒・仏の三つの要素の優れたところを、各人の主体的な判断で融合して形成されてきた、と見ることができる。言い換えると、日本の神道にも、儒教や仏教の要素が入り込み、日本の儒教にも神道や仏教の要素が入り込み、日本の仏教にも神道や儒教の要素が入り込み、混然一体のものとして「日本のところ」の根幹を支えるものとなって来たと言える。日本人の大多数は、「あなたの宗教は」と聞かれば、自分は特定の宗教を持たない（無宗教である）が、神儒仏の良いところを取った「日本のところ」がその代わりとなっていると答える。（新渡戸稲造が日本人に「宗教」はないのかと問われ「武士道」と答えた真意はここにあるのでは？）

(参考) 宗教と霊性 (宗教心)

「宗教」は明治期に作られた翻訳語で、辞書では「信仰の対象である教義や宗教行事を実践する教団の存在」を前提とし、例えば「経験的・合理的に理解し制御することのできないような現象や存在に対し、積極的な意味と価値を与えようとする信念・行動・制度の体系」と言うように記述する。キリスト教を始めとする世界の宗教、寺院仏教 (宗派仏教) 等はこれに該当する。

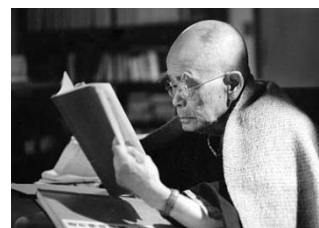
二宮尊徳が日本のこころを形成する要素として揚げた神道、仏教、儒教から取り入れた宗教的要素 (科学的概念で捉えきれない哲学、宇宙観、生命観等) は、「霊性 (宗教心)」と理解することはできるが、必ずしも信仰の対象として特定の教義や教団への帰依を前提とするものではない。その意味で「日本のこころ」における霊性 (宗教心) の重要性は否定されないが、それは特定の宗教への帰依を意味するものではない。

2. 日本の生活文化の背景には禅のこころがある

(1) 日本文化と禅

勝海舟は「幕末から明治期の混乱の世に、曲がりなりにも今日までやって来ることができたのは、ただ剣術と坐禅の二つによってだ」(氷川清話) と語っている。

鈴木大拙著「禅と日本文化」(岩波新書) は、日本型仏教 (禅)、古神道 (自然観や美意識等)、日本型儒教 (古学・陽明学等) が融合する日本のこころと日本の文化の関係について、海外の人にも解るように解説している。禅と美術、禅と武士、禅と剣道、禅と儒教、禅と茶道、禅と俳句・・・



(2) 歴史上の人物から見る日本のこころと禅の関係

聖徳太子の十七条の憲法は、神仏習合の大和心の出発点であると言われ、鹿島・香取を出発点に、柳生新陰流、直真影流とつながる剣道の奥義には禅や神道のこころが謳われ、鎌倉時代以来の士農工商の生活や文化の万般にわたって、神仏儒習合の日本のこころが受け継がれてきた。禅は、北条時宗、上杉謙信、武田信玄、宮本武蔵、柳生但馬守・・・幕末の西郷隆盛、勝海舟、山岡鉄舟等へと、今日につながる武士道精神のバックグラウンドになっている。禅はそれと同時に、中世からの匠の道 (彫刻、工芸、美術) や茶道、松尾芭蕉の俳句を始めとする文学の隆盛、二宮尊徳らの農業復興運動、石田梅岩らの商人道 (心学) の発達に大きな影響をもたらした。そして、モノづくりの工業や三方良し精神の商業、人を大切にする日本型経営に至るまで、今日の日本の産業・生活・文化を支える力の源泉になっている。

(3) 禅のエッセンスは「小我」と「大我 (真我)」=人類普遍性を持つ真理

禅のこころは、「不立文字」とされ、言語や論理によっては把握し難い (体験による把握が不可欠の) ところにあると言われるが、唯識 (※) の哲学で見ると概念的に判りやすいかもしれない。

※ 利己主義と利他・慈悲のこころ、性悪説と性善説

唯識は、4世紀に北インドに生まれた無著と世親の兄弟が大成させた、大乘仏教の根幹をなす思想の一つ。唯識では、人間の意識を、意識の世界（眼、耳、鼻、舌、身の五感と意識《頭脳による論理的理解》の六識）と無意識の世界（末那識と阿頼耶識の二識）の八識に分けているが、無意識の世界の二つの関係を次のように解説する。末那識は、人間の生存本能、自我意識からくる自己保存、自己防衛のころであり、競争、戦争につながる。阿頼耶識は、過去の祖先の行動・経験が個々の要素（種子）として記憶されている深層のころであり、大きな方向性に於いて人間をより良き方向に向かわせる、慈悲、友愛、共生につながる希望の無意識である。小我と大我（真我）という言葉があるが、末那識は小我の領域の無意識であり、阿頼耶識は大我の領域のそれであるといえる。坐禅の無意識の状態は、究極的にはこの阿頼耶識に達するものと考えて良い。人間を末那識の塊と見ると性悪説に陥り、阿頼耶識の存在を知ると性善説に至る。

※ 生まれる前の無意識の世界からの呼びかけ

人間のころ（性格）は、誕生以来後天的に発達し（育成され）変化するものと、先天的に祖先の行動や経験の積み重ねで形成されて来た先天的なものの両面がある。人は生まれた時は真っ新で、幼児教育、家庭教育、学校教育、社会教育の過程を経て、ころの性向が育てられていくわけだが、一方で生まれる前からの両親や祖先のころの性向が無意識の世界で生まれる子供のころの性向に影響を及ぼし、民族性や国民性として後世代のころの性向に、良かれ悪しかれ一定の方向性を加えているということはないであろうか？海外の観察者が見る日本のころのポジティブな側面は、後天的決定の環境において仮に一時マイナスの状況（生活習慣や社会の断絶）に陥ったとしても、そう簡単に消え去るものではなく、遺伝子の中に伝わり継承されていく可能性は残されていると見るべきではないか？「父母未生以前の自己本来の面目」

※ こころは型から現出する

礼儀作法や行動様式は、ころの発露の結果が形（型）と定着したものである。祖先を含めた過去の経験智から、人間はまず形（型）を整えることによって、そこから整えられたころが自ずから発出するというを知っている。坐禅のみならず、武道や芸道が、ころを整える手段として、何よりも型からの習得を重んじるのはこのためであろう。社会にビルドインされた直観的道德規範の例＝「ならぬものはならぬ」（会津日新館の掟）、「一日不作、一日不食」（百丈和尚）

(4) 社会人こそ坐禅に取り組む意義がある

坐禅は、ころの安定（メンタルヘルスの獲得）をもたらすものに止まらない。より積極的に、世の中に新しい価値を生み出す力を湧出するものだ。

坐禅の効用－1 自己のころの安定、メンタルヘルスの改善・向上

坐禅の効用－2 インノベーティブな発想、新しい価値の創造、実践智の獲得、組織・社会運営の円滑化（ウィンウィンの道＝活人剣）、新しい世界観・宇宙観の獲得

坐禅は専門僧だけの独占物ではない。日常生活で日々課題に取り組んでいる生活者、

社会人こそが主体的に坐禅に取り組むことが重要である。

白隠禅師の師の正受老人、至道無難禅師、その他、鈴木正三、石田梅岩、松尾芭蕉・・・もみな、禅に取り組んだ俗人（実社会人）である。

※ オープン坐禅会の推進

日本のところは、過去数百年、天災と戦乱の世の中をしぶとく生き抜いて来た士農工商の万民が、等しく練り上げてきたもので、背景には古代以来のアニミズムの上に神・仏・儒習合の過程が存在する。そして、そのベースにあるものの一つに禅がある。禅の真髄は、空（悟り）の世界に入ることだけではなく、そこから色（現実）の世界に戻り、現実（色）と真理（空）との火花を散らした現場（色即是空、空即是色）に生きること。禅の真理は、現場の課題と向き合うところにこそ、より大きな叡智のひらめきと悟りとなって顕現する。深山幽谷に住して修行に専念する専門僧も大事だが、それ以上に日夜生活や仕事に神経と体力を振り絞っている第一線の社会人が、坐禅の習慣を日常的に持つことこそ、もっと重要なことだ。戦国から江戸にかけて、専門僧ではない、士農工商の万民が主体的に取り組んできた在家禅（居士禅）の伝統こそ継承されるべきところの文化だと思われる。

当センターでは、このような考えから、社会人が働きながら主体的に生活習慣として坐禅を親しむことのできる環境として、（宗教を超え、宗派を超えた）オープン坐禅会を都心の便利な場所で定期的を開催することを提案し、実践している。

アメリカやヨーロッパの禅も実際の修行者は、社会人である一般在家の人達である。今や日本人よりも多いとみられる世界の禅者と手を組み、オープン坐禅会の環が広がっていくことが期待される。

今日の社会では、正しいところ（正念）の獲得の機会として、必ずしも結跏趺坐の坐禅の形に拘らず、椅子坐禅や、マインドフルネス、ヨガ瞑想、静坐等々まで広げて、日々の生活習慣の中にところを整える機会を取り戻すことが、まず必要ということであろう。

3. 東洋思想と西洋思想の交流

ギリシャ哲学は、ヘレニズム、インド、中国の哲学・思想と交流し、相互に影響しあって来た。禅でいう「大我」の世界が、阿頼耶識に対応する世界だとすれば、それは西欧哲学とも相関する要素がある。スイスの心理学者カール・グスタフ・ユングは、人間の無意識には、「個人的無意識」と、「集合的（普遍的）無意識」の二つがあるとし、後者は「人類の歴史が眠る宝庫」のようなものであると例えており、いわば阿頼耶識に相当するものと考えることができよう。鈴木大拙はユングの親しい友人であり、またハイデggerとも個人的に交流があったといわれる。(Wikipedia)



キリスト教やイスラム教が一神教であるのに対し、東洋の宗教は多神教であると区別することも可能だが、キリストやマホメッドの生誕以前の段階では、西洋にもアニミズム的、

多神教的なベースも多く存在し、アリストテレスからトマス・アクイナスにつながる「靈性」の捉え方は、仏教や儒教（孔孟思想）のそれと共通する部分が見られ、普遍的真理は東西世界でも深くつながっていると見ることができる。

事実、アレクサンダー大王の東征に見られる文化の東西交流が、ミリンダ王と仏教僧ナーガセーナの対話（※）に繋がり、東西思想は相互に影響し合って「慈悲」とか「大我（真我※）」という人類共通の普遍的価値を共に支えるものとなっている部分もあるのではないだろうか。

※原始仏教の経典「ミリンダ王の問い」（ミリンダパンハ）中村元「仏教経典散策」

※岡潔氏は、教育における自我形成の過程で、小我を超えた「真我」を発現させることの必要性を訴えた。（1968年当時の坂田文部大臣への提言）

宗教を超えた禅の普遍性については、例えば、クラウス・リーゼンフーバー神父（上智大学名誉教授）による坐禅会の開催など、現在でも多くのカソリック教徒の信者が坐禅を行としていることから立証される。

「慈悲」や「大我」の世界に立つ日本のところは、人類的普遍性を持つものであり、私たちは日本（人）を離れるところに「日本のところ」の真髓があるという逆説的真理に気付くことができる。

人類普遍性という点では、キリスト教徒内村鑑三がなぜ「代表的日本人」（西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人）を世界に示したのかを考えてみることも必要であろう。内村はドイツ語訳版後記で概略次のように述べている。「自分の内にあるサムライに由来するものを、無視したり等閑に付したりすることはできません。キリスト者の律法に比し、優とも劣らぬサムライの定めでは、『金銭に対する執着は諸悪の根源なり』であります。たとえこの世の全キリスト教信徒が反対側に立とうとも、真のサムライの子である私は、こちら側に立ち言い張るでしょう。『いな、主なる神のみわが神なり』と」



キリスト教が、イエズス会の宣教師たちによって戦国時代に日本に伝えられながら、その布教に限界があったのは、その領土的野心への日本人の警戒心のためと言うより、例えば鈴木正三が1637年の島原の乱の後に天草・島原の人びとのために執筆したと言われる「破切支丹」という論文にあるように、彼らの説法が、当時の日本人のところに直ちに受け入れ難いものがあつたのも事実であろう。

鈴木正三は、「天地開闢以来幾万年の間、三世（過去・現在・未来）の諸々の仏たちが延々と生きとし生けるものを導いて来たのに、長い間世界の他の国にデウスは出現なさらず、最近になって南蛮（西欧）にだけ何故出現したのか、等々」と、日本人が感じた宣教師の説の諸矛盾を指摘し、切支丹の説を徹底的に論破した。隠れキリシタンの存在も考えなければならぬ事実だが、一方で、正三が、天草の代官となって領民に慕われた弟鈴木重成、息子重辰とともに、天草の鈴木神社に祭られ現在も崇められている事実も忘れられてはならない。

Ⅲ 地球環境の保全・人類の共生を支える日本のこころ（神道について）

1. 地球的規模あるいは地球的視野にたった環境問題としては、例えば（1）地球温暖化、（2）オゾン層の破壊、（3）熱帯林の減少、（4）開発途上国の公害、（5）酸性雨、（6）砂漠化、（7）生物多様性の減少、（8）海洋汚染、（9）有害廃棄物の越境移動等の課題が人類の将来にとって大きな脅威となるとされている。（一般財団法人環境イノベーション情報機構）

今や課題ごとの対症療法的な施策を超えて、経済成長か人類の生存環境維持か、技術の高度化か人間の生命と尊厳の保持か、という大きな価値観の平衡感覚を研ぎ澄ませ、大所高所からの適正な判断と大きな舵取りが期待される事態となって来ている。核兵器・宇宙兵器・AI兵器（ロボット兵器）の制限・廃止、原発など核の平和利用や宇宙開発の管理の問題等にも、日本人の生命観（日本のこころ）は、大きな発言を求められていると言えよう。

2. 山中伸弥教授は、NHKの番組で遺伝子工学（ゲノム編集）が進むと、人間の生命に科学が大きく関与することになり、倫理的な視点からの自己規制がないと「人類が滅びる可能性がある」と発言し、人々を驚かせた。昨年、中国では若い科学者が世界で初めてゲノムを編集した赤ちゃんを作り出したと主張し、世界から非難が舞い上がっている。人類の生命を作り出す生殖技術に科学がどこまで関与すべきかは、真剣に監視されなければならないのではないのか。地球環境問題は帰るところ生命のあり方の問題であり、日本のこころの文化はこれに如何対処すべきと考えたらよいか、真剣に考える必要がある。

3. 一方男女の社会的格差を解消するジェンダーの課題があるが、その本質は社会的差別の問題を超えて、人間の子孫をどのように維持し発展させていくかという地球環境問題に位置づけられるという見方もある。明治以降は別として、日本はどちらかと言うと古代から父系社会というより母系（双系）社会的要素が強く、それが生殖・育児を通じて生命を繋ぐシステムの基本にあったという見方がある。生命を繋ぐという点に着目すれば、ジェンダー論でも日本の社会システムは今後地球的な意味を持ってくると言えよう。また、日本文学においては、国学者の本居宣長が指摘するように源氏物語等仮名を使用した女性文学の隆盛は、「たおやめぶり」として高く評価されており、万葉集以来の「ますらおぶり」に対置されるものとして、日本のこころを支える大きな力となってきた。

4. 世界の強国が先住民族を追いやって征服し、最近ではグローバリズムで世界がモノカルチャー化していく流れの中で、世界の先住民族を調査した月尾嘉男氏（東京大学名誉教授）は、進歩主義的世界観が次の人類の危機を招来する恐れがあるとして、人類は先住民族の智恵に学べと警告している。

- ① 土地の私有という失敗＝共有こそ循環社会の決め手（酋長シアトルの言葉）
- ② 時間に縛られる苦悩＝イヌイトの時間に縛られない狩り
- ③ 将来を考えない人類＝バックキャストによる子孫への貢献（7代先の子孫を考え現在を計画するイロコイ族）
- ④ 万物の霊長という驕り＝自然崇拜と動物・生物との共生の智恵
- ⑤ 進歩の代償である精神的退化（強欲）＝（アマゾン先住民族のアユトン・グレナックの言葉）人間は鳥のように静かに飛び去っていくことができる。通り過ぎるだけなのに、何か記念碑を残そうとする人は自分に自信がないだけ。

以上（月尾嘉男著「先住民族の叡智：遊行社刊」より）

グローバリズムが極端に進む中では、将来日本民族自体も「先住民族」として扱われる恐れがあるのかも知れない。しかし世界中の先住民族の智恵は、人類共通の叡智かも知れず、地球の環境問題はここから解決していくべきものとも思われる。

神道や修験道などの文化的蓄積にみられる自然と共生していく生命的知性に着目すれば、日本のこころにある自然感や美意識は宗教という言葉で括れない。その意味で、地球環境の保全こそ、日本の世界史的使命と考えるべきではないだろうか。

5. 神道については諸説があるが、ここでは狭い意味での宗教と見ず、広く日本人の心性の拠り所、道徳規範の源泉として見て行くことにする。逆に言うと、世界の宗教と対立せず、包み込むように受容できる宗教観（アインシュタインの言う宗教性）だとも言える。（田中英道著「日本の宗教」・30頁）

神道には経典や教義がない。恵まれた自然風土から自然信仰が生まれ、八百万の神といわれるように、万物に神が宿るという思想が定着して行ったのだ。

日本では昔から人々は、神に感謝し、大自然に感謝し、先祖に感謝し、周囲に感謝し、有難い、おかげさまでという思いで生活している。したがって日本では近代以前は何時の時代でも自然との調和が図られてきた。

日本人は「お天道様はすべてお見通し」と言うが、「天」は宇宙をさし、「自然」をさす。神道の祭りは、自然や先祖に対する感謝の念を表明する儀式と言え、また神道は神の前で祝詞をとるが、祝詞とは神をたたえ、神即ち自然に感謝する言

葉でもある。

日本人の清潔好きは世界的に知られているが、古来「神々は清浄を好み、清浄なところにまします」といい、心身の清浄と環境の清浄を尊び、汚れや、汚いことを好まず、汚れは穢れ、穢れは気枯れであり、人の活力を低下させると考える。

これからの地球環境問題への対応において、この自然道とも言うべき神道の考えは大きな働きをしてくれるのではないだろうか。(※)

同時に、神道の基本的な神観念は、世界の宗教対立を包摂する力を持ち、世界平和への政治的なエネルギーとなる可能性を秘めている。

日本では神道と仏教が習合しているが、これは縄文時代を含む長い時間をかけて培われた神道の基層文化のうえに、外来の仏教が千数百年の過程を経て融合し、成立した共存関係でもある。

6. 明治元年（1868年）、明治新政府は「王政復古」「祭政一致」の理想実現のため、神道国教化の方針を採用し、それまで広く行われてきた神仏習合（神仏混淆）を禁止するため、神仏分離令を発した。上からの宗教改革だが、これは民衆の神仏観と大きなずれと齟齬があった。国教化については、政府は信教の自由を同時に進める必要があり、神道の国教化には至らなかった。政府は神社を宗教ではなく「国家の祭祀」として国家が管理し、統制する体制とし、明治39年政府は神社合祀令を出した。民俗学者・南方熊楠は、神社を取り壊すことによって住民の信仰心、道徳心、自治、連帯感が衰えること、神林の乱伐による森林の破壊が生物多様性に危機をもたらすこと、農業、漁業を衰微させ、人の暮らしそのものを崩壊させることになると、神社合祀令に反対した。国家祭祀としての神社神道と古神道の流れは、一方は今日の皇室祭祀に、他方は狭義の宗教ではない今日の日本人の宗教観（宗教性）に繋がっているという見方もできる。



※日本の神道と地球環境問題

神道は自然道であり、自然が神である。一神教と異なり、神道は超越神がはじめに存在して、これが自然をつくったとは考えない。自然が始めから存在し、自然そのものが神である。そして自然は靈的存在である。神道は宇宙のあらゆる存在に靈性を認める。靈的存在ということは、生命（いのち）をもつということである。

神道の世界観は、自然＝神＝靈的存在＝生命をもつ存在。こうした世界観を一神教の学者はアニミズムと言って、未発達な原始宗教とするが、実は一神教発生以前、世界人類はほぼ共通してこうした世界観をもっていた。他宗教に寛容な神道的世界観は、このように人類のより普遍的な世界観と相通するものがあるのではないか。

一神教においては、自然も人間も超越神によってつくられたもの（つまり被造物）で、自然はモノであり霊（生命）をもたないが、人間は神より生命を吹き込まれたがゆえ霊をもつ。ゆえに、人間は自然の一部ではなく、自然の上位にある。一神教における自然、神、人間の序列は、神—人間—自然で、自然は人間の下位にあり、神のステュアートとしての人間の支配をうける。自然の中には、無生物のほか、動植物等すべての生き物が含まれる。ゆえに一神教では、人間と動植物は決定的に異なる。

これに対し、神道では人間は自然から生まれ、自然の一部である。自然の一部である動植物と全く同じ生命をもつ霊的存在である。人間と他の生き物との間に基本的に違いはない。さらに神道では、岩、山、川、海といった無生物も霊的存在と考える。

神道では、自然が神であるから、自然を畏敬し、人間は自然の一部であるゆえ、必然的に自然と共生するといった感覚を生む。こうした神道の自然観は、自然はモノに過ぎず、人間は自然と異なり、自然の上位にあるとする一神教の世界観よりも、地球環境問題をより身近に考えることが出来る世界観だと言えるのではないか。

田中英道著「日本の宗教 本当は何がすごいのか」

IV 政治思想と社会倫理の本にある日本のこころ

(孔孟思想と陽明学等日本の儒教について)

1. 朱子学と日本の儒教

日本で熟成した儒教は、堅苦しい倫理道徳や統治原理（法家の思想）を超えた、気（浩然の気・孟子）や祖先崇拜など、生活文化に根差した日本人の「こころ」の本質にかかわるものである。



儒教については、孔子（前 551～479）が「孝」、「仁」、「信」など家族や近親者を中心とした徳目を思想として打ちだし、性善説の孟子や性悪説の荀子に受け継がれた。東アジアの歴史の流れの中で、秦帝国は荀子の流れを継ぐ法家の思想（道徳の一部である法（刑）即ち統治ルールを重視する）を採用し、中央集権を貫徹した。朱熹



（1130～1200）は性即理の性善説の朱子学を創設したが、隋の時代から 1300 年続く科举制度による官僚支配が続いた中国では、その後朱子学の世俗化が進んだため、明代に陽明学が起り、一方性悪説の法治主義に向かった朱子学は、清王朝や韓国の儒教思想の根幹をなすに至った。朱子学は、日本に伝わり湯島聖堂（林羅山）、昌平黉を経て明治政府の時代には官学を中心に繋がった。



一方で、孔子や孟子の思想は、理を前提に社会統治を重んじる朱子学とは異なり、ルールの前に宗教・哲学・倫理の要素を色濃くもった考え方で、日本に於いては、伊藤仁斎に始まる古学の流れや陽明学として深められ、江戸時代後期から幕末にかけて、多くの儒者を打ち出した。この古学や陽明学は、朱子学が「理」や「知」をまず掲げそこから道徳を展開するアプローチを採ったのに対し、「気」や「行」を重んじ、実践智の確立を重視した。後者の考え方は、禅や神道のこころとも合流し、私塾や手小屋などを通じて日本の士農工商の各界に伝播し、神・仏・儒が融合した日本のこころの形成につながったと考えられる。

儒教の家族主義・一族主義、祖先崇拜（靈魂と魂魄）は、日本に於いて、神道や仏教（日本に伝来した中国の仏教は既に儒教の影響下で変質し、インド仏教とは異なったものになっていた）と習合し、日本独自の精神文化が形成されて来たと言える。

2. 陽明学、古義学（孔孟思想）、水戸学

以上のように、日本には、幕府の藩校を中心とする朱子学もあったが、一般には堅苦しい朱子学よりも人間のこころの主体的な働き（王陽明の「心即理」）を重視する陽明学が支持された。朱子学と陽明学は、概念的には、論理性と直感的本質把握、知性と感性、読書と坐禅、公と私等々、それぞれ重視するポイントが正反対である。

（参考）代表的な日本の陽明学者



中江藤樹

(1608-1648) 江戸初期の儒者。近江の人。名は原、字(あざな)は惟命(これなが)、通称与右衛門。伊予国大洲藩に仕えたが、のち帰郷。初め朱子学を信奉、孝の徳目を重んじ「翁問答」を著す。晩年、王陽明の著書に接し、我が国陽明学の祖となる。村民を教化し徳行をもって聞こえ、近江聖人と称された。門下に熊沢蕃山がいる。近江聖人中江藤樹記念館



熊沢蕃山

(1619-1691) 江戸前期の陽明学者。京都の人。字(あざな)は了介。中江藤樹に学び、岡山藩主池田光政に招かれ治績をあげた。「大学或問(わくもん)」などで政治を批判し、幕府に咎(とが)められて禁錮中に病死。

荻生徂徠

(1666-1728) 江戸中期の儒学者。江戸の人。物部氏より出たので物(ぶつ)徂徠などと称する。初め朱子学を学んだが、のち古文辞学を唱え、古典主義に立って政治と文芸を重んずる儒学を説いた。柳沢吉保・徳川吉宗に重用された。

上杉鷹山

(1751-1822) 江戸中・後期の大名。米沢藩主。名は勝興・治憲(はるのり)。鷹山は号。藩政の改革に努め、自らも節儉を率先励行、財政改革・殖産興業・新田開発を行い、藩政を立て直した。藩校興譲館を設立。

佐藤一斎

(1772-1859) 江戸後期の儒学者。美濃岩村藩家老の子。昌平黌(しょうへいこう)の儒官となる。朱子学を講じたが、学説としては陽明学に拠(よ)り、渡辺崋山・佐久間象山・林鶴梁など多くの俊秀を輩出した。著「言志四録」など。

山田方谷

山田方谷は、文化二年、阿賀郡西方村(現高梁市中井町西方)の農商の家に生まれた。五歳の時から新見藩儒者丸川松陰のもとで朱子学を学び、神童と言われていた。両親の死によってやむなく家業の製油業を継ぐが、そのかわら学業にも励む。その様子が藩主板倉勝職の目に留まり、文政八(1825)年、二人扶持を与えられ、藩校有終館の会頭となる。江戸遊学後は朱子学から陽明学に転じ、陽明学者熊沢蕃山に多大な影響を受けた。嘉永二(1849)年、勝静が藩主となると共に元締役兼吟味役に抜擢され、ついに藩政の表舞台に立つことになる。そして、方谷の手腕によって、松山藩は、負債十萬兩を返済したのみならず、さらに十萬兩の余財をみるに至った。

河井継之助

幕末の長岡藩家老。佐久間象山・古賀謹堂に学び、開国論を唱える。戊辰戦争では中立をはかったが、官軍が認めず、長岡城の激戦で重傷を負い、死亡。

吉田松陰

(1830-1859) 幕末の尊王論者・思想家。長州藩士。兵学を学び、長崎・江戸に遊学、佐久

間象山に師事した。ペリー再来の時、密航を企てて、下獄。のち萩の自邸内に松下村塾を開き、高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文ら維新の指導者を育成。安政の大獄に連座、刑死した。

橋本左内

(1834-1859) 幕末の志士。越前福井藩士。緒方洪庵・杉田成卿（玄白の孫）に医学と洋学を学び、のち藩校明道館学監となった。將軍継承問題で、一橋慶喜の擁立に尽力し、安政の大獄によって斬首された。

高杉晋作

(1839-1867) 幕末の志士。長州藩士。吉田松陰門下。下関砲撃に備えて奇兵隊を結成、また、1865年以降、藩の主導権を握って藩論を倒幕に転換、第二次長州征伐の幕府軍を押し退けた。

陽明学は、幕末では大塩平八郎、吉田松陰、高杉晋作、西郷隆盛、河井継之助など討幕派・反政府派の行動原理となり、明治に入ってから反政府の自由民権派の流れに繋がっている。（加地伸行著「大人のための儒教塾：中公新書」等より）

なお、幕末の古学から水戸学へのつながりは、伊藤仁斎、荻生徂徠、会沢正志斎を経て、日本型プラグマティズムを重視した福沢諭吉の実学に及んでいるという見方もある。

中野剛志著「日本思想史新論：ちくま新書」

伊藤仁斎は、本場の中国（および朝鮮）において儒教の主流となった朱子学を否定し、孔子・孟子の教えに帰る「古義学」を提唱した。「古義学」は何より「孔孟の本旨」を明らかにしようとするもの。仁斎は、宋の時代に朱子によって大成された宋学（＝朱子学）は高遠で、思弁的な儒教の体系であるが、孔子・孟子の本来の意思、教説からはずれた邪説であるとした。



仁斎は『論語』を「最上至極宇宙第一の書」という。『論語』は孔子の卑近な日常の言行録であるが、仁斎は、日常の卑近で平明な教えこそ真実の教えであり、卑近な日常における実践こそが聖人の道であるとし、『論語』を正しく読むことは、孔子の示した実践の英知を読み手が共鳴共感するような体験をすることであると説く。

日常の経験世界を超越したところに「理」の支配する高邁な真実の世界があるとする朱子学の大系を仁斎は虚妄であるとし、こうした形而上学の体系は道徳の荒廃を招くと主張。

仁斎は「理」ではなく、「仁」を道の基本におき、「仁」は「愛」以外の何者でもないとする。仁斎の思想の根底にあるのは、人間をあくまで「活物」とみる人間観で、朱子学の「理」を「死物の条理」とし、あくまで人間を含めた宇宙を「活物」あるいは「運動体」とみる。仁斎は、「生々の天地観」という新鮮な自然観を近世社会に提示した。

人倫日用の立場を重視し、平明な実践の学を提唱する仁斎は日本の儒学に新しい展開を示した。（中野剛志は、仁斎の日常生活における実践を尊重する「プラグマティズム」こそ、仁斎の思想の重要な到達点であるとしている。）参考資料 吉川幸次郎「仁斎東涯学案」、日本思想史大系『伊藤仁斎伊藤東涯』、相良亨『伊藤仁斎』ペリカン社

V 日常の生活習慣が構築する日本のこころ（マンガ・働き方・礼・女性活躍）

1. 世界が注目するマンガ・アニメの日本のこころ

「北斗の拳」、「進撃の巨人」等の日本のマンガのリーダーの姿が、何故世界の人々のこころに響くのか、「鉄腕アトム」、「アンパンマン」、「ブラックジャック」、「ルパン三世」がなぜ、世界で評価されるのか。そこから日本のこころの在りかを再確認してみよう。



まずは、日本マンガの実態から。

日本マンガは、発行部数が聖書のそれに匹敵するほど多く、世界中で読まれている。

日本のマンガの販売トップは現在のところ「ワンピース」で四億五千万部売れている。以下、「ドラゴンボール」「ナルト」が二億五千万部、「名探偵コナン」が二億部、と日本マンガランキングで 15 銘柄が発行部数一億部を超えている。鉄腕アトムや北斗の拳も一億部発行されている。これは世界の小説業界全体の発行部数に匹敵する部数である。

単体で世界の小説の発行部数をはるかに超える聖書にも、日本全体のマンガ発行部数が匹敵するのではないかという考察がある。

最近のブームと言われる「鬼滅の刃」は、現在のところ、累計発行部数は 2500 万部だが、年間の発行部数が長年一位だったワンピースを抜いたと噂されている。ストーリーは、「鬼」が存在する大正ロマンのような世界観になっており、鬼になってしまった妹を元に戻すために主人公が次から次へと襲ってくる敵や試練に立ち向かう話。敵を倒すときに、主人公が使うのが修行の末に得た「水の呼吸」と呼ばれる境地で、ちょっと禅に通じるものがある。

日本のマンガの魅力については、日本の若者には、趣味で人気漫画を題材にファンアート（二次創作）を制作する人口がかなり多い。二次創作とは、原作のキャラクターやストーリーをベースにしたパロディ作品の創作。シリアスなものからコメディ・ギャグまでいろいろある。また、オリジナルで作品を描くアマチュアも、海外に比べるとかなり多いようだ。

日本のマンガ文化の一つ、コミケットにもそれは如実に表れており、年々参加する海外の人も増えているようだ。コスプレを楽しんだり、そこで発行される同人誌の購入が目的で。

海外も日本も、歴史をたどればマンガの起源は古く、日本では法隆寺にその痕跡があるとも言われ、海外ではエジプトの壁画にそれを求める人もいる。また日本では鳥獣戯画などが有名。

近代のマンガにおいて欧米のものは風刺漫画が主流だったのではないかと。日本でも風刺漫画は盛んだが、滝沢馬琴の里見八犬伝や江戸時代に盛んに発行されていた物語・伝奇ものなど、どちらかというストーリー表現をするために、近代マンガの原型のようなものが出来上がってきたようだ。自然に日本のマンガの方が、ストーリーも多彩で物語の奥行

やキャラクターも奥深いものになる結果となったのかも知れない。また日本のマンガは、個人の思想や感情の発露である部分も大きく、プロに限らず、アマにとっても、ひいては今の若い日本人全体にとって、マンガは自分を表現する手段の一つとなっている。

テーマはヒーローもの、サスペンスもの、恋愛ものから人間性を深くえぐったもの、またその複合タイプなど、海外に比べて非常に多彩である。日本におけるドラマや映画の原作に多数採用され、大人の鑑賞に堪えていることを考えると、内容も質的に高度なことが伺える。

アメリカではアベンジャーズシリーズなど、アメコミ（アメリカンコミック）を原作とする映画が製作され、日本でも大ヒットしている。こちらも内容は深く、政治風刺や人間関係の複雑さ、ストーリーの奥深さや世界観は素晴らしいが、ただ、アメコミはマンガ発行会社ごとに世界観が統一的に設定され、マンガ家は個人の自由で描くことはできないようだ。日本と違って、会社の組織としてマンガをプロジェクトとして制作しているので、製品であって、日本でのような自由さはないような気がする。

無論、日本でもすべてがマンガ家の自由にはならず、編集者や出版社の意向が反映されるのだが、海外に比べて、多彩で作家の個性も重んじられている。

最後に、コミカライズというのも日本の漫画の特色かもしれない。ヒットした小説などを漫画化する、という試みは、作品 PR も兼ねて近年どこの出版社でも試みられている。原作となる小説やゲームを下敷きにマンガ化するのだが、原作と作者が異なるにもかかわらず、原作にうまくリンクできると、さらにそれぞれの売り上げが上がるので常套手段とされている。

「鬼滅の刃」は漫画をベースにアニメ化されているが、このアニメ化が成功したために、マンガも非常に売れたという経緯がある。

小説・漫画・アニメで日本人は何を求めているのか？

それは自分探しではないか。自分が惹きつけられた題材を、様々な表現で反復して味わった結果、自身で何かを得ている。また、出版元で同じ題材で小説・漫画・アニメが発売されると、さらに、ファン層が二次創作として漫画や小説を制作する。この辺が文化とされる所以だ。日本におけるマンガは、単なる暇つぶしの娯楽ではない。それは、日本のマンガに触れた海外の人にも、同じ魅力となって受けとられているのかもしれない。昨今は、二次創作を行なうのは、日本だけではなく、韓国や中国の人口も増えている。欧米からマンガ家になるために来日する人もいる。

「鬼滅の刃」「鉄腕アトム」「北斗の拳」「進撃の巨人」「アンパンマン」「ブラックジャック」は、利他的な慈悲のこころや自己犠牲をテーマにする部分がテーマとして大きい。また、「ルパン三世」はチームワークの面白さか。日本のマンガ家が描く作品には、シリアスに限らずたとえコメディでも、ふと作者の人生観がのぞくことが多く、自分の在り方や生き方に及ぼす影響も少なくないと思われる。

(以上マンガ家の silversnow 氏による)

2. 労働・生活の位置づけと働き方改革

AIの進展で、働き方改革が求められている。日本に於ける労働観が問われる問題である。個人の生活においても、企業の従業員においても、労働の時間は生活の時間のための必要悪の時間ではなく、労働と生活とを区分けせず、両者が一体化したものとして労働に従事する価値を感じる人が多いのではないだろうか？労働の時間は人間が生きがいを感じる価値ある時間でもあり、そのあり方は労働時間当たりの生産量で産業の競争力を図る生産性基準のみで評価されるべきではない。生産性を上げるために一義的に労働時間を短縮すれば足りるとする「働き方改革」の方向には、多くの日本人は違和感を覚えるのではないか。・・・・・・

3. 掃除・片付けの文化、礼儀の文化（形から入って心を整える）

今世界的に人気の高い近藤真理恵（こんまり）の「人生がときめく片づけの魔法」は、2010年末に出版、ミリオンセラーとなり、著者はアメリカの雑誌TIMEの「世界で最も影響力のある100人」に選ばれた。

欲望を断ち切って、思い切ってものを捨てる精神は、断捨離という仏教的な行動様式につながるものであり、日本の社会の中にはある程度定着している。精神は行動様式となって社会の中で形として現れ、型となって継承されていくものでもある。

教育における掃除の奨励（トイレ掃除）は、学校だけでなく、企業の現場の規範として今でも日本の組織に定着している。企業の場合は、5S（整理、整頓、掃除、清潔、しつけ）として、日本発の経営管理手法として高く評価され、国内だけでなく世界に普及している。

礼儀正しさは、日本のこころの一つの側面だ。16世紀にヨーロッパへ派遣された日本の4少年（天正遣欧使節団）の身のこなしは、整ったこころの証と受け取られ、日本がヨーロッパに勝る文明国であることを示して、世界に一大センセーションを起こしたことがある。その伝統は礼儀作法として伝統を繋ぎ、礼法も例えば小笠原流礼法として今日に繋がっている。茶道や香道など女性が中心的に担って来た芸道の形（型）に、日本のこころが息づいているといえよう。

4. 日本文化の「ますらおぶり」と「たおやめぶり」

江戸時代の国学者賀茂真淵と本居宣長は、万葉集と古事記の研究を通して、それぞれ日本文学における「ますらおぶり」と「たおやめぶり」を評価した。

賀茂真淵は万葉集の研究した結果を『万葉考』に残し、男性的でおおらかな様（ますらおぶり＝荒益男振）を良しとした。一方、本居宣長は古事記と源氏物語を研究し、その結果を『古事記伝』と『源氏物語玉の小櫛』に残した。本居宣長は女性的で優雅な様（たおやめぶり＝手弱女振）を良しとした。

国学者の流れは、外来の仏教と儒教を外来のものとして見、平田篤胤は仏教と儒教を徹

底的に排除した。平田篤胤の思想である復古神道は幕末の尊王攘夷運動につながっていったと見られている。司馬遼太郎はドナルド・キーンとの対談本「日本人と日本文化」（中公文庫）の中で、日本人の「ますらおぶり」と「たおやめぶり」について語り、同氏は、日本人の気質のベースには「たおやめぶり」があると主張している。手弱女振りという字面からは、軟弱、優柔不断、内省的などやや否定的なイメージがあるが、彼はむしろ優れた気質であるとし、その一方、「ますらおぶり」とは、剛直、合理的、決断が早い、男性的となると思うが、何か正しいことを守りぬくという点で、「ますらおぶり」の人はくるっとどこかに転換してしまっているのに、「たおやめぶり」の人は頑固であるともいっている。

女性的な「たおやめぶり」の懐の深い芯の強さは、単純な男性的な「ますらおぶり」の欠点を超克する、日本のこころの重要な要素であると思われる。

5. 日本がめざす女性活躍社会とその世界的な役割

日本の社会は、アマテラス以来女性が社会の中で、重要な地位を占めていた事実がある。

長い間、「母系制から父系制へ」の移行と考えられてきた古代日本の家族像が 1970 年代に入ると、明確な婚姻居住規制の欠如や父方・母方共通の親族呼称、中世前期まで続いた男女を問わない均分相続、外戚や女帝の登場、一部に見られた女系による政治的・社会的地位の継承（子の側から見れば、母系の政治的・社会的地位の継承）などから、双系制社会とみる学説が登場して有力視されるに至っている。（ウィキペディア）縄文時代の遺跡調査によると、古くは双処居住であったようだ。ただし、前述の通り、出自および双系制の定義が確立していないために日本における双系制への理解も父系母系双方の出自集団に属していたとする考え、出自集団の欠如による現象とする説、従来の説を支持する立場から「母系制から父系制へ」の過渡期が長期化した説などが混在しているなど、学説は定着していない。

一方、家族の中での父親と母親の役割分担については、ギリシャや中東に残るアジア的要素の中で、女性を生命を繋ぐシステムの中心に置く思想があるが、昨今の欧米発の一義的な男女平等論とは違った流れが、世界の潮流に残っていることには留意する必要がある。

理想的な女性リーダー像について、日本の中央官庁の某幹部が以下のように語った話をどう考えるか？今を時めく、キャリア・ウーマンには二種類の人達がいる。同氏が某県の部長に出向したときの話として次のような話をしてくれた。「自分が仕えた女性知事は、政策や人事の判断力や決断力に於いて素晴らしいリーダーであると感心した。何処の大学で組織管理手法を学んだのか、何処の企業で経験を積んだのか、何故なのかを本人に聞いたところ、『自分は企業に勤めたこともなく、立派な大学で勉強したこともない。しかし長年の子育てを通じて人間とは何かを良く知ることができた。私の判断はすべて、そこから出ているもの』との説明だった。自分（中央官庁幹部）が東京に帰任して、同僚や企業の数多のキャリア・ウーマンを沢山見るが、みな自分と同じ価値観で仕事をしている男性に見えた」

VI 真のサムライとは？ 剣道・弓道・合気道に見る武士道のこころ

1. サムライジャパンの活躍？

「サムライ」という言葉が、マスコミを通じて、若者の世代に広がっている。しかし、サムライの精神、武士道精神について、どれだけ本質が理解されているのだろうか？ サッカーや野球など所謂体育会系の世界では、体験を通じて理解は進むと考えるが、報道で見るかぎり、誤解している向きが多いように思える。

サムライのこころは、戦いの荒ぶるころではなく、全く逆の静かな平常心、相手を尊重し、思いやるこころ……なのではないか？ 勝利した後の大声の叫び、喜びの涙や、ガッツポーズは、否定するものではないが、サムライの言葉にはなじまない。

武士道は、おおやけのための勇気（公儀）や、勝敗を離れるこころ、相手を思いやるこころ（惻隠の情）がなければならぬ。静かに客席のゴミ掃除をする観客の方が、試合に勝って雄叫びをあげる選手より、よっぽどサムライに近いと言えるのではないか？

2. 武士道とは何か

勝って驕らず敗者をいたわる（惻隠の情）、その現れた例

(1) 小平奈緒と李相花

韓国の2018平昌（ピョンチャン）記念財団は7日、昨年2月の平昌冬季五輪スピードスケート女子500メートルでライバルとして金メダルを争い、レース後には互いの健闘をたたえ合った小平奈緒と韓国の李相花（イサンファ）に「韓日友情賞」を贈った。五輪の遺産を後世に伝えるという財団の活動趣旨に合うと判断した。（朝日新聞デジタル2019年4月7日）

(2) 乃木大将と水師営の会見

日露戦争にて乃木大将率いる第3軍は、5カ月にわたり約6万人の死傷者を出す激闘の末、旅順要塞を開城させた。明治38年1月1日、旅順要塞守備司令官ステッセル中将は降伏。5日、乃木大将とステッセル將軍による会見が水師営郊外の民屋にて行われた。



会見に先立ち、明治天皇は山縣有朋を通じて、乃木に対し「将官ステッセルが祖国のために尽くした功を嘉し給い、武士の名誉を保たしむべきことを望ませらる」との聖旨を送った。これを受けた乃木は、敗軍の将に恥辱を与えてはならないと帯剣を許し、従軍記者たちの要請にもかかわらず、たった1枚の記念写真しか撮影させなかった。会見場で乃木はステッセルにロシア軍の守備の頑強さを称え、対するステッセルは日本軍の武勇と乃木將軍の不撓不屈の精神を激賞した。またロシア皇帝に対する電奏の送達を感謝し、自己と部下将卒に対する明治天皇の寛大なる待遇を感謝した。

しばし歓談の後、ステッセルは姿勢を正し、乃木がこの戦で息子の勝典、保典二子を喪ったことに「閣下の御心境いかばかりか」と哀悼の意を述べた。これに対し乃木は「二人の息子がそれぞれに死処を得たことを喜び、これぞ武門の面目である」と応えた。両将は日本側の用意した昼食を採りつつ、つい数日前まで激闘を繰り広げた仇敵同士とは打って変わり、和やかな雰囲気ですれ親し、「昨日の敵は、今日の友」の関係となった。ステッセルは今日の記念に自分の愛馬を乃木に贈ることを伝え、乃木はこれを謝し、軍の手續きに従い、他日、自分の手元に来た時には永く大切に労りたいと応じた。会見は2時間続いた。ステッセルは会見後、幕僚に「自分がこの半生のうちで会った人の中で、将軍乃木ほど感激をあたえられた人はいない」と語ったという。

乃木は1月13日旅順要塞に入場し、翌14日、旅順攻防戦にて戦死した将兵を弔う招魂祭を挙げる。自ら起草した祭文を涙ながらに奉読した。

日露戦争終結後、ステッセルはロシア本国にて旅順開城の責任を問われ、軍法会議に掛けられ、死刑を宣告された。これを聞いた乃木は、元第3軍参謀の津野田是重少佐にステッセルを擁護するよう依頼。津野田少佐は、旅順開城がやむを得ざるものであったことを綿密に論証し、パリ、ロンドン、ベルリンの各新聞に投稿した。そのかいあってかステッセルは死刑から免れた。

ステッセルは特赦後、モスクワ近郊の農村で静かに余生を送った。生活に困窮したステッセルに、乃木は名前を伏せ、しばしば少くない金額を送ったという。

明治天皇崩御を追って乃木が殉死した際、ステッセルはモスクワの一僧侶と記した弔慰金を送った。

(3) 黒田清隆・西郷隆盛と庄内藩

庄内藩は徳川四天王の一人、酒井忠次を藩祖とする譜代大名である。幕末騒乱の折、江戸市中見廻り組（新徴組）を担当し、勤皇浪士の取り締まりをはじめ、その本拠である薩摩藩江戸屋敷を焼き討ちにした。官軍の奥州攻略に当たっては薩軍に大損害を与え、領内に一兵も入れなかった。しかしながら大勢利あらず、庄内藩も降伏のやむなきに至った。こうした経緯から、過酷な処置を受けるだろうと、藩主はじめ重臣より藩士に至るまで覚悟していた。しかし降伏会談の席上、示された条件は思いのほか軽いものだった。

藩主は蟄居謹慎、藩士も謹慎を命ぜられたが、帯刀お構いなし。大砲数門のみ接收してその他の武器弾薬は藩重役預かりというものだった。しかも占領軍の薩軍宿舎は表戸と窓を閉ざし、市内の通行自由を許された庄内人士に肩身の狭い思いをさせなかったほど徹底したものだ。



藩主と降伏会談を終えた薩軍参謀黒田清隆は、対等に腰かけていた席を降り、敗軍の将である藩主に対して、「戦いに勝敗あるは兵家の常とは申せ、御心中推察申し上げます。大命により任に当たりましたが、野人は礼にならわず、失礼の点は重々御容赦いただきたく存じます。現下の日本の情勢を察し、これからは心一つにして天朝様に忠義を尽

したく存じます」と、一体どちらが勝者かわからないような遜った態度で接した。

「老子」の「戦いに勝ちては葬礼を以て之に^お処る」（戦いに勝ったものは、驕ることなく、葬儀に臨む人のように恭謹の態度で敗者に対応しなければならない）。この薩軍の処置が、最悪を覚悟していた庄内藩主をはじめ藩士、領民に感銘を与えた。庄内藩家老・菅実秀は明治2年に上京し、黒田清隆に面会して深く謝意を表したところ、黒田は「イヤ、あれは自分がやったのではない。親父の指示にしたがっただけだ」とのことで、一連の処置が西郷の考えによることが明らかになった。しかしその時、西郷は薩摩に帰っていて、会うことができなかった。

この事情を知った庄内藩では、家督を継いだ忠篤公（18歳）が明治3年、藩主以下70余名が薩摩に赴き、百余日に渡り留学し訓練を受けた。

西郷は、庄内藩に対して絶えず気をかけ、明治5年には藩主忠篤公を、翌6年には弟の忠宝公をドイツに留学させている。

西郷が明治6年政変に敗れて帰郷した後も子弟を次々に私学校に留学させ、明治8年までにその数19名。最後の留学生である伴兼之（18歳）と榊原政治（16歳）は、薩摩士族の決起に際し、西郷や私学校監督の篠原国幹から庄内藩に帰国するよう説得されたが応じようとせず、薩軍に従軍して戦死した。

明治22年、明治憲法発布に伴い、西郷の賊名が解かれ、追贈。上野公園に銅像が建設された。菅実秀は、西郷の記録や記憶を集めて「南洲翁遺訓」を編纂させた。

(4) 連合艦隊司令長官・伊東祐亨と敗将清国北洋艦隊提督・丁汝昌

日清戦争において海軍にて勝敗の帰趨を決めたのが、明治27年7月25日の黄海海戦だった。連合艦隊の主力艦「松島」「厳島」「橋立」は排水量4,278トン、対する清国北洋艦隊の主力艦「定遠」「鎮遠」は排水量7,335トンと倍近い。

当初、世界の大方の予想では清国艦隊勝利と思われたが、それを覆し、北洋艦隊は4隻が撃沈、1隻が擱座自沈したのに対し、連合艦隊は2隻大破、2隻中破と、伊東祐亨司令長官率いる連合艦隊の圧倒的勝利だった。この海戦で日本海軍は黄海の制海権を得、旅順口を一日で落としたため、北洋艦隊は山東半島の威海衛に逃げ込んだ。威海衛は北洋艦隊の根拠地である。そこに水雷艇隊が夜襲をかけ、清国艦艇を次々に葬り去った。

伊藤長官は戦前、威海衛を2度訪問したことがあり、その際、北洋艦隊の丁汝昌（ていじょしょう）提督から歓迎を受けた。その後、丁提督が北洋艦隊と共に日本を訪問した際には、伊東が丁を歓待。2人は日清それぞれの海軍育ての親ともいえる。2人は打ち解け、肝胆相照らす友人となった。

伊東長官は威海衛の丁汝昌に対し、異例ともいえる内容の降伏勧告文を送った。「時局の移り変わりは、不幸にも僕と閣下をして互いに敵となるに至った。しかしながら、僕と閣下との友情は依然として昔ながらの温かみを保っているものと信ずる。（中略）いま貴国は老朽化しているが、これを立て直すのは一朝ではいかない。



一艦隊の存亡などたかが知れている。小さな節操は捨て、しばらく日本に亡命し、時節を期してはどうだろうか。そのうち貴国が閣下を必要とする時が到来するだろう。僕は日本武士の名誉に誓って請け負う」それから十数日後、隷下軍隊の不穏な空気に絶望した丁は、降伏を決意。

伊東宛に「全ての艦船と砲台兵器を献ずるので、兵員を帰還させてやってほしい」との降伏文書を提出。伊東はこれを了承。丁に葡萄酒、シャンパンを1ダース、干し柿を贈る。しかしその時、すでに丁は毒をあおいで自決していた。

伊東は北洋艦隊の使者から丁の亡骸をジャンクで運ぶことを聞くや「いかに敗軍の将とはいえ、丁提督はアジアにその名を知られた北洋艦隊の司令官である。その棺をジャンクで運ぶとは何事か」と一喝。当初、没収予定だった輸送船「康済号」に乗せて送るよう命じた。

丁の遺体を乗せた「康済号」が威海衛から出港する時、旗艦「松島」は弔砲を放ち、連合艦隊各艦は半旗を掲げ、全将士は舷側に整列して敬礼する登舷礼式で見送った。伊東は敵の提督に最大の弔意を払ったのである。

北洋艦隊消滅の知らせを聞いた光緒帝は怒り、丁汝昌の財産を没収し葬儀も許さなかったという。一方、日本では丁の死が伝えられるや、勝海舟は「海外における一知己」という漢詩をつくり、樋口一葉は「中垣の 隣の花の散る見ても つらきは春の嵐なりけり」と詠み、その死を悼んだ。

(5) 佐久間艇長

1910年（明治43年）海軍の第六潜水艇は山口県新湊沖で訓練中沈没して佐久間以下14名の乗組員全員が殉職した。引き揚げられた艇内から佐久間の遺書が発見されたが、その内容は発表されるや国内外から大きな反響を呼んだ。



殉職した乗組員は、ほぼ全員が自身の持ち場を離れず死亡しており、持ち場以外にいた乗組員も潜水艇の修繕に全力を尽くしていた。佐久間自身は、艇内にガスが充満して死期が迫る中、遺書を書き、明治天皇に対して潜水艇の喪失と部下の死を謝罪し、続いてこの事故が潜水艇発展の妨げにならないことを願い、事故原因の分析を記した。

(6) 武士の嗜み

武士道には美意識（嗜み、潔さ、等）もある。たとえば、和歌や漢詩の創作、辞世の句、作法。八幡太郎義家と安倍貞任とのやり取り（衣の盾はほころびにけり）、太田道灌（七重八重 花は咲けども 山吹の 実（蓑）の一つだに なきぞ悲しき）

3. 剣と禅

剣の真剣勝負には、腕や力だけでは対応できない。正しいところを保つことがポイント。流派にもよるが、奥義に示されているのは、神道の清明なところ、禅における拘りのない自由なところ、大きなところである。

(1) 柳生新陰流の奥義書

免許皆伝の目録の中には、禅の一句「西江水」が入っている。中国三大大河の一つ西江の水を一気に飲みつくした境地を求めたものと言われる。

(2) 不動智神妙録

沢庵禅師が江戸幕府の剣道指南柳生但馬守に送った剣の極意は「不動智」であった。

不動と言っても石や木のように固めず、逆に心を一か所に止めない動の極致に置く。ここは何処にも止めなければ全てに働く。応無処住而生其心（まさに住する処無くして其の心を生ず）、隋処作主立処皆真（随処に主となれば立処皆真なり）



(3) 宮本武蔵

宮本 武蔵は、江戸時代初期の剣術家、兵法家、芸術家。二刀を用いる二天一流兵法の開祖。京都の兵法家・吉岡一門との戦いや巖流島での佐々木小次郎との決闘が有名で、後世、演劇、小説、様々な映像作品の題材になっている。

外国語にも翻訳され出版されている自著『五輪書』には十三歳から二九歳までの六十余度の勝負に無敗と記載がある。国の重要文化財に指定された『鵜図』『枯木鳴鴉図』『紅梅鳩図』をはじめ『正面達磨図』『盧葉達磨図』『盧雁図屏風』『野馬図』など水墨画・鞍・木刀などの工芸品が各地の美術館に収蔵されている。



剣では目付を重視し、「観の目強く、見の目弱く、うらやかに見るべし」という。

(4) 直心影流の法定の型

理屈に頼るまえに、代々伝わる「型」から入ることによって、日本のこころの発露を体感することは、古来から重視されてきた真理である。

直心影流の法定の型については、山田次朗吉から加藤完治（農本主義者）、小川忠太郎（剣道家、人間禅師家）に伝わる流れと、大西英隆（百錬会）に伝わる流れがある。

加藤完治の孫の加藤達人氏は祖父が創設した茨城県内原にある日本農業実践学園の理事長で、剣道家でもあるが、日ごろ剣道競技に殆ど参加せず型の稽古しかしていなかった自分が平成16年に剣道7段の昇段試験を合格したのは、坐禅と法定の型の稽古という基本があったからだと自ら述懐する。（令和2年1月人間禅・禅フロンティアでの講演）

氏によれば、剣法は大きな大木で、その根は坐禅であり、幹は型であり、剣道競技は枝葉に過ぎないと言う。枝葉だけで幹や根が無い剣道は、竹刀の当てっこのチャンバラゲームに過ぎないということであろうか？

捨て身、相討ち、合体が、直心影流法定の型の真髓であり、小川忠太郎は「相討ち・合体は坐禅の見性（悟りの境地そのもの）なり」という。

4. 弓と禅

人類の歴史上、弓矢は狩猟の道具として洋の東西を問わず必ず民族が持っていたものである。その中で、日本の弓の特殊性は、長大な弓の形状にあり、弓を引く形も含めて美的である。古代には弓矢を祭祀の器具として使い、神武天皇の弓矢を持つ姿がそれを象徴している。以下は、オイゲン・ヘリゲルの「弓と禅」(スティーブ・ジョブズも愛読)による。

明治時代、弓聖と言われる阿波研造範士に、ドイツ人哲学者ヘリゲルが弟子入りした。ドイツの哲学者らしくロジカルに物を考えて弓道の稽古をするヘルゲルに対し、阿波師範は「無術の道に至る道は容易ではない。」「術の無い術とは、完全に無我となり、我を没することである。」「あなたは無心になろうと努めている。あなたは故意に無心なのである。それではこれ以上進むはずはない。」と言葉を放つ。しかし、その言葉に納得できないヘリゲルは「無心になるつもりにならなければ無心になれないでしょう。」と返す。射撃の名手でもあったヘリゲルは、射撃の応用で無心に引いたような方法を習得するが、師範は静かに弓を取り、無言のまま座布団に座ってしまう。



「的を狙ってはいけない。的に中てることはもちろん、その他どんなことも考えてはいけない。弓を引いて、矢が離れるまで待っていなさい。他の事はなるがままにしておくのです。」と阿波師範。「中てるとなれば狙わないわけにはいかない。」とヘリゲル。

ある日、夜ひとりで道場に来るようにとヘルゲルは言われて道場に行くと、暗闇の中、師範が的の前に線香だけ灯して二本の矢を放ち、二本とも的中させた。的に矢を取りに行ったヘルゲルは、不思議な表情で戻ってくる。その手には、一本目(早矢)の矢に二本目(乙矢)が中って引き裂いている矢があった。この出来事以降、ヘルゲルは質問を止めて一心に稽古に取り組み、師範から免許と弓を贈られてドイツに帰国した。

<阿波研造先生の言葉>「的に向かって目を閉じる。すると的の方から近づいて来る。次第に的と一体になる、それは自分と仏が一体になる事です。的は自己の不動の中心にあるから狙う必要なく、矢を目の前の中心におくだけです。」

5. 合気道と禅

合気道は、武道家・植芝盛平が大正末期から昭和前期にかけて創始した武道。植芝盛平が日本古来の柔術・剣術など各流各派の武術を研究し、独自の精神哲学でまとめ直した、体術を主とする総合武道である。



武術をベースにしながらも、理念としては、武力によって勝ち負けを争うことを否定し、合気道の技を通して敵との対立を解消し、自然宇宙との「和合」「万有愛護」を実現するような境地に至ることを理想としている。主流会派である合気会が試合に否定的であるのもこの理念による。「和の武道」「争わない武道」「愛の武道」などとも形容され、欧米では「動く禅」とも評される。

盛平の弟子の中には藤平光一を初めとして、ヨガを日本に持ち込んだ中村天風の影響を

受けた合気道師範も多く、合気道の精神性重視という気風を次代に継承している。

6. 少林寺拳法と禅

少林寺拳法は戦後の日本において、荒れ果てた社会、夢も誇りも持てない人間の姿をまのあたりにした開祖 宗道臣（1911～1980）が、1947年香川県多度津町において“人づくりによる国づくりの行”として創始した日本の武道である。自分の身体と心を養いながら、他人とともに助け合い、幸せに生きることを、禅をベースとして説きつつ、日々の修練では拳技実習のみならず、必ず瞑目・半跏趺坐で坐禅を実施する鎮魂行を行う。また、指導者は専門を認められておらず、それぞれの仕事を通じて社会でも認められるリーダーとして、後進を無償で指導することが求められている。そのようにして、豊かな社会を築くために行動できる真のリーダーたる人財（質の高い人＝国家の財産）を育てることを目指している。



VII 明治維新の立役者の生きざまを支えたもの（西郷隆盛・勝海舟・山岡鉄舟）

この三名に共通してみられるのは、禅や、陽明学、古神道、武士道等に裏打ちされた、人生観、社会観、世界観であり、公明正大で博愛に満ち、自由闊達でのびのびとした日本のこころである。

1. 西郷隆盛

西郷 隆盛（さいごう たかもり）〈1828 年- 1877 年〉は、薩摩藩士出身の武士・軍人・政治家。

◆ 生涯

薩摩藩の下級武士であったが、藩主の島津斉彬の目にとまり抜擢され、当代一の開明派大名であった斉彬の身近にあつて強い影響を受けた。斉彬の急死で失脚し、奄美大島に流される。その後復帰するが、新藩主島津忠義の実父で事実上の最高権力者の島津久光と折り合わず、再び沖永良部島に流罪に遭う。しかし、家老・小松清廉（帯刀）や大久保利通の後押しで復帰し、1864 年の禁門の変以降に活躍し、薩長同盟の成立や王政復古に成功し、戊辰戦争を巧みに主導した。江戸総攻撃を前に勝海舟らとの降伏交渉に当たり、幕府側の降伏条件を受け入れて、総攻撃を中止した（江戸無血開城）。その後、薩摩へ帰郷したが、1871 年に参議として新政府に復職。さらにその後には陸軍大将・近衛都督を兼務した。1873 年大久保、木戸ら岩倉使節団の外遊中に発生した朝鮮との国交回復問題では開国を勧める遣韓使節として自らが朝鮮に赴くことを提案し、帰国した大久保らと対立、この結果の政変で江藤新平、板垣退助らとともに下野、再び鹿児島に戻り、私学校で教育に専念する。佐賀の乱、神風連の乱、秋月の乱、萩の乱など士族の反乱が続く中で、1877 年に私学校生徒の暴動から起こった西南戦争の指導者となるが、敗れて城山で自刃した。（ウィキペディア（Wikipedia））



◆ 禅と陽明学との出会い

西郷の生き方を支えた思想と行動の背景に禅と陽明学がある。20 代の頃、郷中の仲間と草牟田の誓光寺にて坐禅修行した。

当時、誓光寺には円了無参禅師がいた。無参禅師は、陽明学にも造詣が深かったが、政争の中、藩の掟に触れ死一等を減ぜられて 53 歳にして出家し禅門に入った薩南第一の善知識と言われ、西郷が参禅した頃は既に隠棲し、末寺の誓光寺住職を務めていた。

西郷は、なぜ参禅しようと思ったのか。大道寺友山の『武道初心集』によれば、「武士であろうとする者は、元日の朝、雑煮の持ちを食べようとして、箸を取る瞬間から、一年が終わり大晦日の夕べまで、日々常に死ということを心に集中しておかなければならない」とある。しかし西郷の場合、動機はそれだけではない。尊敬する人物の切腹、仕事現場での役人の腐敗と農民搾取、困窮に喘ぐ生活。社会の理不尽さ、八方ふ

さがりの中で生きることを模索し、悶々としていたのではないだろうか。

西郷家では祖父母、両親、四男三女の 11 人家族に加え、召使を雇っていたが、俸禄だけではとても立ちいかない。そこで父の吉兵衛と共に鹿児島近在の豪農から二百両を借り、田畑を買って耕作し、俸禄の足しにしようとしたが、失敗し借金を抱えてしまう。24 歳の時、祖父、父母が相次いで亡くなり、幼い弟妹を抱え、貧苦に喘ぐ。同時期結婚するも、あまりの生活の苦しさからか、妻は西郷の江戸出府中、実家に戻り離婚してしまう。その後、下加治屋町の生家を手放し、郊外の借家に引っ越す。西郷は後に当時を振り返って「自分一代の中で最も悲しかったのはこの時であった」と回想している。

◆ 精神を涵養した坐禅修行

西郷が禅を学ぶに至った直接の動機は、ある禅僧から「儒書に喜怒哀楽の未だ発せざるこれを中というという語があるが、その未発の中とは何か」と訊かれた時、西郷は得意にそれを説明した。しかし^{くだん}件の僧は「そんな講釈は死学問だ、貴殿の生きた実物を見せられたい」と語ったので、西郷も答うべき言葉を知らなかった。それ以降、西郷は禅に精進した。西郷が特に熱心に参じたのは 19 歳から 25 歳にかけての頃である。

従弟の大山巖は、「鹿児島における予の家は、西郷の家に接近していたので、予は六、七歳の頃から西郷に従い、読書や習字を教わった。その頃の西郷は禅を学んでいた。予が朝早くその家（西郷家）に至ると、西郷は既に草牟田の誓光寺の住職無参上人のもとに赴き、講習を終わって帰宅して居るのを常とした。その刻苦勉励には全く驚き至って到底、まねは出来ないと思った」と語っている。

西郷は坐禅から何を掴んだのか。息子の菊次郎は明治 43 年の『日本及日本人』南洲号にて父の回想を記している。「南洲は武術の方ではこれと言う程の技能は無かった。それで万一危難が身に迫った時にはどんな術を心得ていても、最早どうにも仕様のないものである。というのが平生からの覚悟であったようで、或る時剣道の大先生に合つて、南洲が自分には武道の素質が無い事を語った。先生は『イヤあなたには槍も刀も学ぶには及びません。見た所あなたの身の廻りにはどこからも打ち込む隙がない』と語られた」

◆ 良知に目覚め、実行する

坐禅とほぼ同時期、大久保らと共に伊東猛右衛門（祐之、潜龍）の門下に弟子入りし、『伝習録』の講義を受けた。伊東は西郷と同じ下加治屋町で生まれた薩摩藩士で、内外の陽明学者の原稿を集めた『^{よようがくえん}余姚学苑』全 3 巻を著した薩摩で最初の陽明学者である。伊東猛右衛門との出会いを契機に大塩平八郎の『^{せんしんどうきつき}洗心洞筭記』を読んだ。これは生涯を通じての愛読書となった。

陽明学は「知行合一」というように実行の学問である。不断の努力によって私欲を払いのけ、天から授かった良知、すなわち自分の心に本来備わっている是非善悪を知

る心に目覚め、発揮することを目指す。良知に目覚めることは、権威主義や教条主義からの訣別を意味する。そして良知を求める姿勢によって大同社会が実現できるという思想である。大同社会とは天の公理に基づき、人々は能力に応じて地位を得、人心が和合し、相互扶助のゆきわたった平和な理想社会のこと。西郷はこうした社会の実現を夢見たのだ。

佐藤一斎の『言志四録』全 1034 条を読み込み、その中から 101 条を抄出し繰り返し読んでいた。

斉彬の命を受けて京都上洛中、陽明学者春日潜庵を訪問、時勢を談ずる中で、その学徳に深く感動し、終生尊敬する師と仰いだ。西郷は明治 2 年に薩摩から 5 人の青年を春日潜庵の下に遊学させているが、その門出に際し「お前たちは、書物の虫になってはならぬ。春日という人は、至って誠実な人で平生も厳格である。おまえたちの修行にはちょうど宜しい。これからは武術だけではいけぬ。学問が必要だ。その学問は活きた学問でなくてはならぬ」と強く語った。西郷にとって禅と陽明学は一つのものであり、生涯にわたる生き方の土台だった。

参考図書：『日本及日本人』南洲号 『禅者列伝』宇井伯寿 『武道初心集』大道寺友山 『真説「陽明学」入門』林田明大

2. 勝海舟

伊勢松阪の豪商との交流による視野の広さは別として、本人の言に「若い頃からの坐禅と剣術とがおれの土台となって後年大そうためになった。（幕府）瓦解の時分、万死の境に出入して、ついに一生を全うしたのは、全くこの二つの功であった。」とある。

「氷川清話」

◆ 生い立ちと修行の日々

9 歳の時、男谷道場（直心影流）に入門し、18 歳から男谷信友の弟子である島田虎之助の道場に通う。毎夜、王子権現に行き拝殿の礎石に沈坐黙考し、時々木刀振り全身精気満ちてまた静坐を繰り返し夜が明けて家に帰る。19 歳で直心影流免許皆伝となる。18 歳ころ島田虎之助より「剣術の奥意を極めるにはまず禅学を始めよ」とすすめを受け、牛島弘福寺にて坐禅修業を始める。島田は九州で仙厓和尚に参禅していた。



島田虎之助（出身地中津藩では蘭学が盛ん）から蘭学を学ぶことを勧められ、箕作玄甫を訪ね入門を願うが「せっかちな江戸っ子に蘭学は向かない」と断られ憤然として去り、永井青崖のもとで蘭学を学び始める。

海舟の知恵と根気強さがわかるエピソードに和蘭辞書ゾーフハルマの筆写がある。辞書は本屋で購入すると六十両する。そこで人から十両で一年間辞書を借り二部筆写し、一部を三十両で売却し借料・生活費他に当て、一部は自分の本にした。また、筆

耕のアルバイトをしていたが、その縁で島津斉彬に海舟の名が知られ、斉彬から老中阿部正弘にも伝わっていた。

海舟は本を読むのが好きで、貧乏で買えないため本屋で書物を読むことを習慣としていた。本屋の主人嘉七から函館の商人渋田利右衛門を紹介される。渋谷は海舟のことを「感心な人だ」といって良き支援者となる。金銭面の援助だけではなく、嘉納次郎作（灘の酒屋、講道嘉納治五郎の父）、浜口梧陵（和歌山の豪商 ヤマサ醤油）、竹川竹斎（伊勢の豪商）を紹介して、海舟が商人ネットワークに入るきっかけを作った。

22歳の頃、洋学者佐久間象山を訪ねる。海舟の号は象山の塾に掲げてあった額「海舟書屋」からとる。

◆幕臣としての活躍（咸臨丸による太平洋横断・江戸城無血開城）

ペリー来航により幕府は広く意見を求める。31歳、「海防に関する意見書」を幕府に提出する。この意見書を大久保一翁が推挙し、老中阿部正弘の目に止まり採用される。

33歳、長崎で汽船の運用等の伝習（長崎伝習所）を命じられる。36歳、軍艦で鹿児島を訪れて島津斉彬と会う。斉彬より弟の久光を紹介され西郷隆盛のことも話題に上る。斉彬から庭を一緒に歩いているときに「人を用いることは急にはいけない、又一事業は十年立たぬと取りとめがつかない。」と教わる。

38歳、遣米使節の護衛、及び長崎伝習所の成果を試すため咸臨丸でアメリカに向かう。太平洋横断に成功しサンフランシスコで連日大歓迎を受ける。

46歳、官軍による江戸城総攻撃が迫った時、幕府は恭順の方針となり官軍との交渉を海舟に一任した。西郷との交渉の結果、世界史的にも稀な、無血開城が実現した。

◆明治の勝海舟・幕臣の生活支援と人材育成に努める

明治となり、徳川家は駿府に移り、旧幕臣の困窮は深刻なものがあつた。海舟も静岡に移住し旧幕臣の経済支援のため様々な活動をし、代表的な例に静岡のお茶の生産がある。海舟の助言により静岡はお茶の全国的な産地となった。

海舟は次の世代の人材育成にも助力をし、新潟県上越市の川上善兵衛には、西洋化で日本でもワインが飲まれることを察し葡萄栽培を奨め、川上は日本ワイン葡萄の父と呼ばれるようになった。教育界においては、東洋大学創立者の井上円了や同志社大学の新島襄を支援している。その他海舟の支援で活躍した人物は多い……

海舟の最後の使命は、徳川慶喜の名誉回復すること。そのため、旧幕臣から批判を浴びながらも明治政府とのつながりをもち続けた。76歳、慶喜は明治天皇と面会により名誉回復を実現し、幕臣としての最後の務めを果たした。「わが苦心三十年、少しく貫く処あるか。」翌年、使命を終えた安堵感から77歳で亡くなった。（高山みな子）

◆晩年の福沢諭吉との論争、日清戦争批判

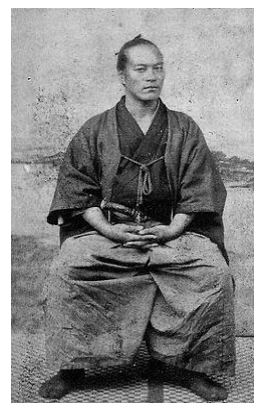
福沢諭吉の「やせ我慢の記」に対して、「批判は他人の事、行蔵は我にあり」の返書、伊藤博文には、「清との闘いは100年の恨みを買う」と諫める書簡を送った。

3. 山岡鉄舟

◆ 生涯

山岡鉄舟（1836－1888）は幕末・明治の偉人。江戸無血開城の立役者、明治天皇の侍従、剣・禅・書の達人として世に知られる。鉄舟は六百石取りの旗本小野朝右衛門高富の四男として本所に誕生。父が飛騨高山の郡代に任ぜられ、少年期を高山で過ごした。父の死後江戸に戻り、剣術修行に明け暮れた。

鉄舟は33歳のとき、歴史の舞台に登場する。1863年、「鳥羽・伏見の戦い」で薩長の新政府軍に敗れた将軍徳川慶喜は江戸に逃げ帰る。新政府軍は駿府に到着して江戸城総攻撃を決定。何としても朝敵の汚名を避けたい慶喜は、絶対的恭順を決意。恭順の赤心を新政府軍総督府に伝える役を、護衛高橋泥舟（鉄舟の義兄）の進言を得て、山岡鉄舟に託した。慶喜に呼ばれ、主君の堅い恭順の意志を確かめた鉄舟は、決死の覚悟で駿府に向かい、大総督府の参謀西郷隆盛との乾坤一擲の談判に及んだ。そして、城を明け渡すこと、兵器を渡すこと、軍艦を渡すこと等5箇条の恭順の実効が示されれば慶喜に寛典が下される約束を取り付け、慶喜に報告。慶喜の喜びはたとえようもなかった。続いて江戸に進駐した西郷隆盛と勝海舟との間で史上名高い会談が開かれる（鉄舟はこの会談に同席）。こうして江戸無血開城は、西郷と勝だけでなく、事前に鉄舟の働きがあって実現した。維新後徳川家は駿府藩主（後静岡藩知事）となり、旧幕臣とともに駿府国に移住する。鉄舟は藩の幹事役（後に権の大参事）として混乱する藩を治めた。旧幕臣を帰農させ、茶園の開墾などを進めた。鉄舟は、37歳のとき新政府の強い要請を受けて、明治天皇の侍従となった。鉄舟の人格を深く認める西郷が、若い天皇（21歳）の教育係として鉄舟を宮中に推挙した。鉄舟は53歳で死去した。胃がんだった。坐禅を組んだままの大往生であった。



◆ 鉄舟の剣、禅、書

山岡鉄舟は剣・禅・書の三道を極め、そのいずれにおいても超一流の大家であった。剣は幼少の頃より諸師について、すさまじいまでの修業に明け暮れた。鉄舟は剣によって心身を錬磨し、心が万物と一体である理を悟ろうとした。鉄舟は「予の剣を学ぶは、偏に心胆錬磨の術をつみ、心を明らめ以て己れ亦天地と同根一体の理、果たして釈然たるの境に到達せんとするにあるのみ」と言う。45歳のとき、大悟して一刀正伝無刀流を開いた。

禅は、武道を全からしめるには剣と禅の修業の他なしと父に教えられ、13歳の頃から始めた。20歳代の鉄舟は、昼は剣術、夜は坐禅という生活だった。三島の龍沢寺星

定和尚に参禅し、40歳のとき大悟。なお天龍寺の滴水和尚に師事し、45歳の時、印可を得た。鉄舟の剣・禅の修業で到達した人間力は衆に抜きん出ている。滴水禅師は鉄舟のことを「あれは別ものじゃ」と言うのが常だった。

鉄舟には次の逸話がある。某居士が鉄舟に臨済録の提唱を願った。鉄舟は、それは鎌倉の洪川和尚に聞かれたらいいと断ったが、某居士は承知せず是非とも拝聴したいといって引き下がらない。鉄舟は「よろしい、ではやりましょう」と言って某居士を道場に誘った。そこで門人と撃剣の稽古をし、居室にもどった鉄舟は「私の臨済録の提唱はどうでしたか」と聞いた。驚く無言の某居士に、「私は剣客だから剣道で臨済録を提唱した。私は武人だから僧侶の真似はしない。足下は禅を修業されていると聞くが、臨済録はただ活字をならべた書物ではありません」と言った。

禅者鉄舟はまた、禅の偉大な外護者であった。鉄舟は「わしは禅を仏教の根源だと信じているので、その根源の強く、深く張られることを祈っている」と言っている。

書については、鉄舟は最初に飛騨の岩佐一亭に学んだ。その後王羲之を学んだが、慶応の頃より弘法大師の書に傾倒した。明治13年、剣と禅に悟るところがあって書の呼吸も変わり、雄渾で気品と暖かみのある鉄舟の書となった。

鉄舟の家の玄関には、朝から晩まで揮毫を頼みに来る人が後を絶たなかった。鉄舟は快く受け、その数は多いとき一日千枚にも達した。人が揮毫のお礼にと差し出す謝金を鉄舟はありがとうと言って受け取った。鉄舟は「私はそもそも書を書いて礼をもらうつもりはないが、困った者にやりたくて、くれればもらっているだけさ」と言った。

鉄舟は揮毫を救世の方便としていた。一枚ごとに「衆生無辺請願度」の句を唱えて揮毫した。揮毫の謝礼金は、社会公益、災厄救助、寺院の慈善事業、復興事業などに使われた。

◆ 鉄舟の人と思想

鉄舟は幕臣であるが、内外の情勢は徳川幕府を否定する方向に進むだろうし、開国も必然の勢いであると見ていた。そこで幕府を中心に諸藩を糾合し、朝廷の命を奉じて挙国一致の体制で攘夷を断行したのち大政を奉還したら、徳川氏も有終の美をなすことができると考えていた。

鉄舟が慶喜の命を受けて駿府に行くとき、海舟が「この際に幕府のとるべき方針は、どうしたらよいと思うか」と問うと、「今日の我が国においては、もはや幕府の薩州のと、そんな差別はない。挙国一致だ。天業復古の好機は今だ」と答えたとき海舟が語っている。

海舟は、「山岡は明鏡のごとく、一点の私をもたなかった。だから物事に当たり即決して豪もあやまらない。しかも無口であったが、よく人をして反省せしめたよ」と語る。

西郷は鉄舟のことを、「命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬ、といった始末に困る

人ですが、あんな始末に困る人ならでは、お互いに腹を開けて、共に天下の大事を誓い合うわけには参りません。本当に無我無私の忠胆なる人とは、山岡さんのごとき人でしょう」と評した。

日本人の典型と評される山岡鉄舟の人間性の根本に、たぐいまれな正直さがあった。海舟は「鉄舟は馬鹿正直者だ。しかし、馬鹿もあれくらい馬鹿になると違うところがあるよ」と評している。

鉄舟が8、9歳の頃、母より字を習っているとき「忠孝」の意味を母に問うた。よく理解できなかった鉄舟は、「母様はその道をお守りですか、私はどのようにしてその道を行えばよろしいのですか」と聞いた。すると母ははらはらと涙を流し、「鉄よ、母はその道を心がけているものの、至らぬ女ゆえまだ完全に行うことはできません。いつもそれを残念に思っています」と答えたという。8、9歳の我が子に涙を流してこんな告白をする女性が今時いるだろうか。鉄舟の正直は、神官の娘であった母の馬鹿正直ともいえる正直をうけついだものだった。

維新政府より天皇の侍従になるように要請されたとき、幕臣の強い自覚をもつ鉄舟は断ったが、断り切れず、10年間だけという約束で引き受けた。そのとき鉄舟は、「晴れてよし曇りてもよし富士の山 もとの姿は変らざりけり」と詠んだ。死ぬ一年前の明治20年華族に列せられ、子爵を授けられたが、そのとき「食うて寝て 働きもせぬご褒美に 蚊族（華族）となりて またも血を吸う」と詠んだ。

参考図書 大森曹玄著『山岡鉄舟』 牛山英治著『山岡鐵舟の一生』 山岡鉄舟口述、勝海舟評論、勝部真長編『武士道』 小島英熙著『山岡鉄舟』 平井正修著『山岡鐵舟』 高野澄訳『山岡鉄舟劍禅話』

Ⅷ 聖徳太子の和の精神から世界・人類に貢献できる日本のところを考える

「和をもって貴し」と為すという太子の憲法一条は、神・仏習合の日本のところの出発点にあり、これからの人類が目指すべき共生社会をリードする世界観（基本理念）に繋がるのではないか？

1. 十七条の憲法の制定

聖徳太子（574－622）は、用明天皇（第31代）の皇子として、古代日本上昇期の波乱と緊張に満ちた飛鳥時代に生まれた。19歳のとき、推古天皇（初めての女性天皇、聖徳太子の伯母）の皇太子となり、同時に摂政となって49歳で逝去するまで、天皇を補佐して国政を主導した。

太子は604年十七条憲法を定めた。深い人間観と、為政者としてのたぐいまれな洞察力をもつ深遠な思想家聖徳太子の精神が、この十七条に表現されている。主な条文を見てみよう。（読み下しは、梅原猛著『聖徳太子Ⅱ憲法十七条』による）。

一に曰く、和をもって貴（とうと）しとし、忤（さからう）ことなきを宗とせよ。

二に曰く、篤く三宝を敬え。三宝とは、仏と法と僧なり。

（仏は悟った人、法は真理、僧は修行者）

四に曰く、群卿百寮、礼をもって本とせよ。

（群卿百寮とは位の高い官僚のこと。礼によって民を治めるのは儒教思想である。）

五に曰く、餐（あじわいのむさぼり）を絶ち、欲（たからのほしみ）を棄て、明らかに訴訟（うったえ）を弁（さだめ）よ。

六に曰く、悪を懲らし、善を勧むるは、古（いにしえ）の良き典なり。

九に曰く、信はこれ義の本なり。事ごとに信あるべし。

十に曰く、忿（こころのいかり）を絶ち、瞋（おもてのいかり）を棄て、人の違うことを怒らざれ。

十七に曰く、夫れ事は独り断（さだ）むべからず。必ず衆とともに論（あげつら）ふべし。

太子は大乗仏教の菩薩道（菩薩思想）の実践に努めた。菩薩とは仏になろうと悟りをもとめて修行している人のことをいう。菩薩道の中核にあるのは、人に奉仕し、利他行に徹し、人を救済する実践である。

大乗仏教は出家して世間を離れ、独り悟って満足するのを理想と考えなかった。聖徳太子は出家した僧ではなく、一国の摂政の地位にいた政治家である。

太子は数ある仏典の中から、『法華経』、『勝鬘経』と共に『維摩経』の注釈を行った。『維



摩経』では、在家にありながら仏弟子たちよりはるかに深い覚りの境地に達した維摩が仏弟子たちを教える。

太子は日本を菩薩の国に造りあげたかった。国民一人ひとりが菩薩として生きる国。とりわけ群臣・官僚は菩薩道に励み、民に奉仕し、民を救済する利他行の実務に精通する。そしてトップである天皇は位の高い菩薩として、無辺の衆生救済を願ってすべてを統べるのを国家の理想とした。

十七条憲法第二条で、太子は仏法僧を敬えとしたが、祭祀など神道の伝統行事も廃することなく維持した。推古15年(607年)には「敬神の詔」を出し、仏教と日本古来の神道は排斥し合うものでなく、十分両立すると考えた。

また、十七条憲法の第四条「群卿百寮、礼をもって本とせよ。それ民を治むる本は必ず礼にあり」、第九条「信は義の本なり、事ごとに信あるべし」、第十六条「民を使うに時をもってするは、古の良き典なり」などは、儒教思想である。

2. 日本のこころの宗教に対する寛容さ

日本のこころの原型である「神・仏・儒の習合」は、この十七条憲法で太子によって始められたとあってよい。

キリスト教の精神は愛、仏教は慈悲、儒教は仁と言われる。日本は和の国であるとの意識が、歴史の早い時期から存在した。「和国」とは日本の国のことである。「やまと」を「大和」と書き、和食、和服、和風、和魂、和洋、和漢といった言葉における和は日本という意味である。

太子は和を国家理想とした。そして和を実現する方法を十七条憲法に定めている。

・人間はみな党派心があるので、よく議論して決めること、そして、大事は決して独断で決めないこと、

・仏(ほとけ)の真理の悟りをよりどころにすること、

・礼を重んじること、

・公正な裁きをすること、

・信頼関係を築くこと、

・我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず。人はすべて凡夫であるから、自己の絶対化を絶対にしないこと、人は皆違っているから、逆らっても怒らないこと、

・リーダーは菩薩道を実践し、民を慈しむこと、

などであるが、こうした定めは、国家目標の「和」を実現する手段にほかならない。

人間は「無明」を抱えており、悟っている人は少ない。人は党派心があり、これが争いの本となるが、党派心は無明から出る。無明は根本煩惱と言われる。世界のすべてのものがばらばらに分離して存在していると考え、自分は他と分離して自分だけで生きていて、自分が世界の中心である、また中心でありたいと思う、自己絶対視・自己中心性の心を無明という。

世界にあるものは他と分離してそれだけで存在しているものは一つとしてなく、すべてつながっている、すべてはつながりの中で縁によって生じるもので（縁起）、個体で存在する実体はない、世界は一つであり、一体である（一如）。こうした世界観は世界平和に貢献する根本思想となりうる。

日本のところは、二つの宗教がお互いを否定し争うならば、それは良識を欠く行為だと考える。一教義による他宗の否定は、独善だと考える。一神教についても日本のところは寛容である。

太子は言う「我れ必ずしも聖にあらず。彼れ必ずしも愚にあらず。共にこれ凡夫のみ。是非の理、詎（た）れかよく定むべけんや」（憲法十条）

人はすべてつながりの中で生きている凡夫であるから、太子が言うように自己の絶対化をしてはならない。人の信念、信仰が違っていても、共存していけばよい。神・仏・儒を習合させる智慧は、キリスト教やイスラム教など一神教に対しても同じである。このような日本のところは、世界のところと共鳴し合い、平和を希求する世界・人類の未来に、必ず貢献できるものがある。

3. 聖徳太子の理想は消せない

聖徳太子については、その存在を否定（或いは疑い、又は軽視）する学説もある。「聖徳」は厩戸皇子（うまやどのおうじ）（575－622）の死後のおくり名で、日本書紀等が天武天皇や為政者に都合の良いように偶像化（捏造）されたという歴史学者もいる。また、思想的に太子の存在を軽んじる学者もいて、「和を重視すると少数派の意見が無視され危険である」（丸山真男等）等の立場の学者や、天皇のみを奉る一部の神道家や儒道家などである。しかし、その事跡について全てが太子のものかの議論の余地があることを認めるとしても、文字資料だけでなく、法隆寺をはじめとする形象資料、死後民衆の間に定着した聖徳太子信仰（伎楽、猿楽、雅楽、歌舞伎の太子伝や兵法の騎馬戦法《聖徳太子流》に至るまで、民衆の神となった）など、厩戸皇子が聖徳太子と呼ばれた歴史的事実を否定しきすることは出来ない。近時教科書で聖徳太子の名前を敢えて載せない傾向が増えているのは如何なものだろうか。

遣隋使の派遣が仮に太子の前にあったとしても、太子が小野妹子を隋に派遣して、「日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す」と対等の国家として付き合いを宣したのは、明らかな事実であり、遣隋使はその後遣唐使になって、平安時代に中止されるまで続した。

太子は実在し、その起こした古代の文化事業は、その後の長い歴史における国家としての独立の気概を打ち立てた点で忘れてはならない。

参考図書：坂本太郎著『聖徳太子』、梅原猛著『聖徳太子Ⅱ憲法十七条』、岡野守也著『聖徳太子「十七条憲法」を読む』、田中英道著「聖徳太子 本当は何がすごいのか」

IX 匠の道、茶道、書道、日本美術等から日本のところを探る

文学や美術、雅、幽玄、侘び寂び、芸事、匠の技など、日本人の生活や社会の隅々に至るまで、そこに存在している日本のところの本質は？

1. 松尾芭蕉に見る俳句と禅の関係

松尾 芭蕉（1644-1694 年）は、江戸時代前期の俳諧師。三重県伊賀上野出身。俳諧（連句）の芸術的完成者であり蕉風と呼ばれる芸術性の極めて高い句風を確立し、後世では俳聖として世界的にも知られる、日本史上最高の俳諧師の一人である。芭蕉が弟子の河合曾良を伴い、元禄 2 年（1689）に江戸を立ち東北、北陸を巡り岐阜の大垣まで旅した紀行文「おくのほそ道」が有名。（Wikipedia より）

松尾芭蕉は、一方で 37 歳の頃に深川の草庵に移り、その頃から坐禅を始め、根本寺（鹿島）の仏頂和尚に師事して嗣法した。白隠の弟子の東嶺円慈の法系図では、白隠の 3 代前の師である愚堂東暎の流れで風羅芭蕉と記載されている。在家禅者がここにもいた。

鈴木大拙の「禅と日本文化」では、「古池や」の句が仏頂禅師との禅問答に発するものとの紹介がある。芭蕉の俳諧は「物我一致」という禅の体験からきている。

2. 匠の技と美

「日本の匠」対談集（近藤誠一）より工芸家の発言を抜粋。

◆ 漆芸・蒔絵 室瀬和美

人間国宝。1950 年生まれ、東京芸大卒。（以下同氏の発言から）

「漆は落葉広葉樹で、中国よりも古いものが出土—12600 年前。9500 年前（日本では縄文時代）から、日本でも中国でも、かぶれを避けて使いこなし始めた。蒔絵の伝統工芸の蒔絵は日本オリジナルなものであった。子供のころから箸を使う習慣が幸いして、日本人の手先の器用さでは世界一と言える。漆は日に当てると直ぐに土に帰るが、保存と手入れを良くすれば 1000 年持つ。食器その他の器具も 100 円のプラスチックではなく、10000 円の漆器を使う方が、経済的にも、地球環境問題の視点からも良いのではないか。陶器と漆器のお椀の使い方も、現在とは逆にし、暖かいご飯は保温に優れた漆器で、熱いみそ汁やお茶は冷ましやすい陶器でというのが合理的。20 世紀の芸術は自己主張表現を指向したが、21 世紀の芸術は相手のことを考えて作る日本工芸の価値観で！」

◆ 竹工芸 藤沼昇

人間国宝。1945 年生まれ、メトロポリタン美術館に 300 点を寄贈。

「伝統工芸は『用の美』である。茶道の千利休は、桂川の漁師が使っていた竹の魚籠を茶室の花活けにした。茶には、気、真善美、無垢のころが必要。竹工芸の後継者育成には茶室教育が最適」

◆ 陶芸・楽焼 楽吉左衛門

楽氏は楽家 15 代当主。1949 年生まれ、東京芸大彫刻家卒。

「ヨーロッパの彫刻は自己表現・・・、陶芸は『用の美』。ドイツの哲学者ハイデッガー（1889-1976）は、「もの」には①自然物、②道具、③芸術作品の三種類があると言うが、日本の工芸は②と③を一体化したもの？ 他力と自力は同じ・・・「私」という主語がない自分こそ日本人の原点。初代楽長次郎の作品「大黒」、「無一物」について柳宗悦の評あり。作為を超えた無心。満月を愛でるのではなく、雨の中で見えぬ月を想うところ（徒然草）である。」

◆ 紬織 佐々木園子

キリスト教徒で、人間国宝。

「紬は、繭から直綿を紡ぐ。後染め、草木染め（緑は黄と藍から）、栗きんとんの黄色はクチナシの実から、紅は烏梅。心を平静にしないと色が濁る。」

◆ 陶芸・鍋島焼 今泉今右衛門

人間国宝。1962 年、佐賀有田で生誕。武蔵野美大卒。

「鍋島焼は有田焼の一つで、鍋島藩ご用達。ヨーロッパに多く輸出される。墨はじきの技法で余白の美を作る。余白＝『空』・・・長谷川等伯の松林図屏風に通じる。」

◆ 能・小鼓 大倉源次郎

人間国宝。1957 年大阪で生誕。

「能は法相宗の唯識の思想に根を持つ芸術。神、男、女、狂、鬼の 5 番立てのストーリー。翁が最初に来る。次いで神=八百万の神々、男=鬪争、出世欲の修羅能、女=花の静で成仏、狂、鬼（鬼退治で終わる）と、ビッグバンから現在までの壮大なドラマが一日がかりで演じられる。そのストーリーが 240 曲もある。能は神も仏も出てくる=神仏習合のストーリー、金峯山寺の本尊蔵王権現（権現は神の姿で出てくる仏）は修験道の役行者（役小角）が修行中に示現したと言われる。このようなものとして、徳川家康が能を武家の式楽として制定した。鼓には、打つ呼吸と間の取り方がポイントになる。」

◆ 刀匠 宮入小左衛門行平

人間国宝。1957 年長野県坂城町で、人間国宝宮入行平の次男として生誕。

「アニメやオンラインゲームの『刀剣乱舞』がきっかけで、最近は刀剣の展示会参加者の八割が女性。刀剣のコレクションとしては、ポーランドのフェリクス・ヤシェンスキーがクラコフの博物館に収集。玉鋼（たまはがね）はたたら製鉄で、低温で純度の高いものを作る。さらに燃焼時に鞆（ふいご）で炭素を減らし純度を高める。」

◆ 友禅 森口邦彦

人間国宝。1941年京都生まれで、京都市立美大卒、フランス留学。

「江戸時代に、小袖の染デザインとして友禅染めが始まる。デザインは写生から始まるが、写生は坐禅瞑想そのもの。さらに造形の世界には神の啓示がある。」

◆ 木工芸 須田賢司

人間国宝。1954年東京生まれ。

「木工芸には、刳物（くりもの＝中を刳りぬく）、挽物（ひきもの＝ろくろで挽く）、指物（さしもの＝裁断した木切れを指す）がある。木工芸は日本オリジナルなもの。古くは、福岡の雀居（ささい）遺跡（AC1世紀）から木工品が出土されている。8世紀の奈良時代の四年間には勅令により4年間で木工の百万塔が制作され全国に配られた。後継者養成のため、自宅で塾を始めている。スピリットが重要で、結果よりプロセスが大事である。」

◆ 彫金・加賀象嵌 中川衛

人間国宝。1947年金沢生まれ、パナソニックでデザインを担当。

「象嵌は、金、銅、銀の合金を作り、鑿（たがね）で掘る。デザインについて、日本や中国は（現物の）花鳥風月を好み、ヨーロッパでは線や幾何学模様など抽象性を好む。」

◆ 茶道 千玄室

茶道裏千家15代当主。1923年京都生まれ。

「桓武天皇が平安京を開いて（794年）以来1200年の歴史をもつ。茶の湯は武家の作法であり、武士は武道の他に、謡や馬術等一連の芸をたしなむ必要があったし、自分も習得した。真善美、和敬清寂、もてなし（以て為す）が重要。匠には、思想的なものと同形的なものがある。ここは『伝承』するもの（禅で言えば『空』）、作品は『伝統』として繋がれるもの（同『色』）」

◆ 細胞を生かす現代技術 大和田哲男

1944年生まれ。自然のままの冷凍保存技術（CAS=Cell Alive System）を開発、例えば氷の結晶を細分化し回答時に細胞を破壊しにくくする技術で食品（例えば生クリーム）を自然のまま保存する技術を開発、食品だけでなく、医療、深海探査等に用途が拡大、世界に広がっていて、同氏は「細胞を生かす男」として評価されている。海士町等日本の地域の活性化にも一役買っている。

「直観力が大事、これはプログラミングできない。・・・ロボットは人間の手足になるが、ハートにはなれない。」

X 幕末から今日につながる実学・平等・人権・分権の思想

明治以降の近代国家建設を急ぐ中央政府によるトップダウンの官僚型政治の影で、その流れに抵抗し、別の形で健全な日本のあり方を追求することとなった多くの流れがあった。

板垣退助、中江兆民、大隈重信ら自由民権運動から田中正造等の社会運動につながる四民平等の人間観の根源は？

富国強兵を目指した明治国家とは別の流れ、一方では自由民権運動に、他方では鉱害等環境破壊防止と農民救済、人権尊重の流れへ、世界に対しては、国際連盟への人種平等決議提案や植民地解放・アジア解放、独立支援への流れへ、

1. 自由民権運動の流れ

明治時代の日本において行われた政治運動・社会運動で、1874年（明治7年）の民撰議院設立建白書の提出を契機に始まった。それ以降薩長藩閥政府による政治に対して、憲法の制定、議会の開設、地租の軽減、不平等条約改正の阻止、言論の自由や集会の自由の保障などの要求を掲げ、1890年（明治23年）の帝国議会開設頃まで続いた。

2. 人種差別撤廃に向けた努力

(1) マリア・ルース号事件

1872年（明治5年）、日本の横浜港に停泊中のマリア・ルース号（ペルー船籍）内の清国人苦力を奴隷であるとして日本政府が解放した事件。日本が国際裁判の当事者となった初めての事例である。

(2) パリ講和会議における人種差別撤廃提案

1919年、第一次世界大戦後のパリ講和会議の国際連盟規約草案委員会において、大日本帝国は「国際連盟規約」中に人種差別の撤廃を明記するべきという提案をした。この提案に当時のアメリカ合衆国大統領だったウッドロウ・ウィルソンは反対で事が重要なだけに全員一致で無ければ可決されないと言って否決した。国際会議において人種差別撤廃を明確に主張した国は日本が世界で最初である。

3. 人道的な救助活動

(1) 1890年9月、オスマン帝国の軍艦「エルトゥール号」の遭難に際して、村民挙げて救助 → 計500名以上の水兵を救助（和歌山の串本沖）

(2) 1920年7月～1921年5月、シベリアに取り残されたポーランド孤児を日本軍が5回にわたって救助＝計375名、

(3) 1938～1940年、ユダヤ人救出 東条英機、樋口季一郎少将（のちに中将）、安江仙弘（やすえ・のりひろ）大佐、杉原千畝、小辻節三など

(4) 1942年3月、工藤俊作海軍中佐指揮による駆逐艦「雷」（いかづち）によるジャワ海

における英兵（敵兵）の救助＝計 422 名 参考図書：恵 隆之介『海の武士道』、
『敵兵を救助せよ—駆逐艦〈雷〉工藤艦長と海の武士道』

4. 官僚主義に対抗した人達

(1) 田中正造の生涯を掛けた鉱害被害救済の活動

田中正造（1841 - 1913）は、日本初の公害事件と言われる足尾鉱毒事件を明治天皇に直訴した政治家。信念で闘い続け、財産はすべて鉱毒反対運動などに使い果たし、死去したときは無一文だった。その思想的基盤を問えば、やはり陽明学的な素養に基づく実践行動があったが、その挫折の過程を経て、晩年にキリスト教に救いを求めざるを得なくなるほど、日本の長い歴史が作った政治の悪弊（事大主義と官僚主義）の壁は大きかったという見方も出来る。



林竹二著「田中正造・その生と戦いの『根本義』」（田畑書店）

(2) 非戦派の軍人たちと三島由紀夫

以下は鈴木荘一著「雪の二・二六：最大の反戦勢力は粛清された」、「三島由紀夫と青年将校：五・一五から二・二六」（いずれも勉誠出版）による。

明治以降の歴史は、以下のように通観できる。

明治政府は近代化を急ぐため廃藩置県、徴兵制、地租改正等の改革を有司専制の形で断行したが、これに対して国民の立場から国会開設運動をしたのが板垣退助などの志士と地主、商工業者などの自由民権派であった。

その結果、憲法制定と国会開設がなされ、普選により二大政党が政権を維持する憲政の常道の時代が訪れて、国民は大正デモクラシーの時代を謳歌することができた。

しかし、その後昭和に入って軍部が台頭し、満州事変、五・一五事件、二・二六事件、日中戦争、対米開戦という経過をたどって、敗戦の憂き目を見るに至った。

この昭和の時代の軍部の台頭と戦争の失敗の歴史については、複雑な背景があるため、その真相の解明はなお十分になされたとは言えない。

この時代をリードしたのは、軍部（海軍・艦隊派と陸軍・統制派）とそれに引きずられた、政治家、官僚、知識人、マスコミであり、その陰で、非戦を貫いた軍人たち（海軍・条約派、陸軍・皇道派）がいたことは、必ずしも十分に評価されていない。

昭和の歴史を根底から運命づけたのは、政党政治の大正デモクラシーを崩壊させた 1932 年の五・一五事件（犬養首相殺害）であるが、その背景には、ワシントン体制（軍縮）に危機感を募らせた海軍・艦隊派の海軍を中心とする国防強化への焦りがあったと言える。海軍・条約派は国際協調を、陸軍・皇道派は農民救済のための軍事予算要求の過半を占める海軍予算の削減、ソ連一国に備えるための対中・対米非戦・和解を、それぞれ主張したが、五・一五事件を契機に、政党政治は壊滅し、斎藤実、岡田啓介の海軍内閣が成立し、その結果、陸軍では、農民の窮乏や日中戦争の拡大に抵抗する非戦論の皇道派が片隅に追

いやられて、日独軍事同盟、日中戦争拡大（対支一撃論）、等を主張する統制派が、海軍・艦隊派とともに権力を握り、それが陸軍青年将校（農民の窮状を案ずる皇道派）の反発を生んで、1937年の二・二六事件をもたらした。

※陸軍統制派

主要人物：永田鉄山、東条英機、辻政信・・・

主張：官僚的主観主義、対支一撃、大東亜に覇権、独伊と連携して英米と対決・・・

※陸軍皇道派

主要人物：荒木貞夫、真崎甚三郎、小畑敏四郎、相沢三郎・・・

主張：現場主義、日露戦争の経験から基本的に非戦、戦うとすれば対ソ一国のみ、中国と和解、米国と協調

二・二六事件後の対中戦争否定派であった陸軍・皇道派の壊滅は、その後の日中戦争拡大、対米開戦に至る日本の運命を決定づけたと言える。※

※皇道派の流れをくむ参謀達のその後の非戦への努力

その後も中国との和平を追求する陸軍の非戦派の努力は、断続的には続いている、南京攻略の後の近衛文麿首相による「国民政府ヲ对手トセズ」との声明発出の過程でも、トラウトマン工作による対中和平成立に望みをかけていた参謀本部多田次長は「中国との前途暗澹たる長期戦は絶対にいけない」と最後まで抵抗を示した。制服組（軍人）が和平を主張し、政治家、マスコミ（背広）が戦争を選択した典型的な例である。

三島由紀夫は、高祖父永井尚志（徳川慶喜を支え大政奉還上表文を書いた幕府高官、五箇条御誓文につながる万機公論の主張の持ち主。しかし明治政府は、有司専制に向かいこの方針を否定）の無念の思いを胸に、明治から昭和に繋がる流れを見ていた。三島の二・二六事件への見方は、その著作や映画「憂国」、「十日の菊」、「英霊の声」に表れている。「英霊の声」は、二・二六で処刑された決起将校磯部浅一の獄中記に書かれているその無念（天皇を信じて決起して裏切られた思い）や、神風特攻隊で死んだ英霊の気持を、「天皇はなぜ神のままで居なかったのか、国民の実態をよく見ずに側近の政治家の判断だけを信じて政治の表舞台に出て失政を行ったのか」という声として記述している。

(3) 石橋湛山

石橋湛山は、明治・大正・昭和の3つの時代にわたって活躍した言論人・政治家・思想家であり、戦前は、植民地放棄論、小国主義を唱えた異色の経済ジャーナリスト。戦後、政界に転身して第一次吉田内閣の大蔵大臣を務め、独立後、鳩山一郎内閣の通産大臣を3回連続して経験し、1955年の保守合同の後、自由民主党第2代目の総裁、第55代内閣総理大臣となったが、健康を害し、2カ月弱で退陣した。退陣後は中華人民共和国との国交正常化に尽力した。

湛山は、後世に2つの超時代的構想を残している。その1つは、戦前から主張してきた、帝国主義の否定を特徴とする「人中心」の小国主義であり、2つ目は、戦後の冷戦時代下に

打ち出した、世界一家を理想とする「日中米ソ平和同盟」構想である。

前者は小国日本の針路を示し、戦後日本の復興・成長に基本理念を提供し、後者は冷戦後のグローバル化する世界の趨勢を予見し、今日の国際社会における国家のあり方を示した。この2つの構想は、いずれもその時代においてでなく、後代になってはじめて価値を認められた先見性のあるものといえよう。

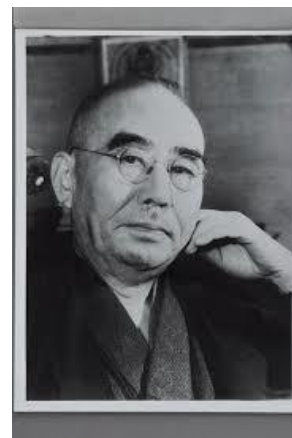
◆ 生い立ちと人間形成

1884年、日蓮宗僧侶の長男として出生。小学3年の時、父は湛山を山梨の長遠寺住職・望月日謙（後に身延山久遠寺法主）に預け、以後、実質的な親子関係は絶たれ、日謙師に育てられる。1895年、山梨県立尋常中学校に入学。湛山は2年落第したため、7年間在籍する。このおかげで第2の恩師、大島正健校長と出会うことができた。大島校長は札幌農学校の第一期生で新渡戸稲造や内村鑑三の先輩にあたる。直接「青年よ、大志を抱け」のクラーク博士より薫陶を受けた熱心な教育者で、牧師経験もあるクリスチャンであった。中学卒業後、上京。第一高等学校を受験するも二度失敗し、早稲田高等予科に入り、翌年大学部文学科（部）の哲学科に進学した。そのおかげで、人生の第3の恩師、田中王堂に巡り合うことができた。

田中王堂は明治・大正期の著名な哲学者・文芸批評家で、プラグマティズムの面で石橋湛山の思想形成に深い影響を与えた。王堂は哲学の価値基準を、書齋の理論から解放し、実社会の生活に置いた。社会の実践面において、王堂は「社会」と「個人」の関係をバランスを重視し、明治末年の国家主義と個人主義のせめぎ合う日本社会の現状と向き合った。時代の要求と乖離した国家主義や観念道徳論を排撃する一方、「自由放任主義」も批判し「欲望の統整」という倫理意識の樹立を唱えた。後にこの流れから自由放任の克服を目指す「新自由主義」の一派が生まれ、帝国主義を批判し、国家的欲望の統制を唱える「小国主義」（小日本主義）思想に結実した。

1907年、早稲田大学文学科（部）哲学科を首席で卒業。定員一人しかない「特待研究生」（今の大学院）に推され、1年間大学の奨学金でさらに研究を深めた。

その後、新聞記者、1年志願兵の経験を経た後、1911年に東洋経済新報社に入社。その後一時、自分の意思で見習士官として再入営し歩兵少尉を経験する。1925年に東洋経済新報社代表取締役専務となり、同年から1936年まで鎌倉町議会議員を務めた。



◆ 小国主義ビジョンの確立と帝国主義批判

湛山は大正デモクラシーにおけるオピニオンリーダーとして、いち早く「民主主義」を提唱。朝鮮の独立運動に理解を示し、帝国主義に対抗する平和的な加工貿易立国論を唱えて台湾・朝鮮・満州の放棄を主張するなど（小日本主義）、リベラルな言論人として知られる。日中戦争勃発から敗戦に至るまで『東洋経済新報』誌上にて長期戦化を戒める論陣を

張る。政府・内務省から監視対象にされ、インクや紙の配給を大きく制限されたが、廃刊は免れた。太平洋戦争では次男和彦が招集され戦死。また戦争末期には、大蔵省戦時経済特別調査室で経済学者や金融関係者と共に戦後研究を行った。敗戦直後の1945年8月25日には、論説「更生日本の進路～前途は実に洋々たり」で科学立国で再建を目指せば日本の将来は明るいとは先見性的な見解を述べている。

◆ 政治家として

敗戦後の1946年日本自由党から総選挙に出馬。落選したものの第一次吉田内閣の大蔵大臣として入閣。デフレを抑えるためのインフレーション施策を進め、傾斜生産や復興金庫の活用を特徴とする「石橋財政」を推進した。そして戦時補償債務打ち切り問題、石炭増産問題、進駐軍経費問題等でGHQと対立する。進駐軍経費は賠償費として日本が負担しており、国家予算の3分の1を占めていた。この巨額負担を下げるよう要求し、負担額を2割削減することとなった。戦勝国アメリカに勇気ある要求をした石橋は国民から「心臓大臣」と呼ばれた。しかしアメリカに嫌われ、1947年の総選挙で当選したが、GHQにより公職追放された。1951年の追放解除後は、自由党・鳩山派の幹部として打倒吉田に動いた。1954年の第一次鳩山内閣で通商産業大臣に就任。翌55年に、戦後の財閥解体の根拠法令の一つであった過度経済力集中排除法を、独占禁止法と置き換える形で廃止した。石橋は中華人民共和国、ソビエト連邦との国交回復を主張したが、アメリカの猛反発を受ける。同年11月、保守合同により自由民主党が結成され、石橋も合流した。

1956年、鳩山首相の引退を受けて、岸信介が自民党総裁選に立候補。石橋は鳩山派の一部を石橋派として率いて立候補した。1回投票では岸が1位だったが、2、3位連合を組んだ決戦投票では、岸に7票差で競り勝って総裁に当選。同年12月23日内閣総理大臣に指名された。内閣発足後、石橋首相は、全国遊説に出かけ、国民に向かって「5つの誓い」(①国会運営の正常化、②政界及び官界の綱紀肅正、③雇用の増大、生産の増加、④福祉国家の建設、⑤世界平和の確立)を訴えた。

石橋湛山内閣の政策方針をまとめると、日本の高度経済成長の道筋を示した積極財政政策、脱安保体制の独立自主外交、および軽武装再軍備の3点である。

しかし1957年1月軽い脳梗塞で倒れ、首相在任期間65日で退陣。

脳梗塞の症状は軽くまもなく回復。1959年には中華人民共和国を訪問、周恩来首相との会談が実現した。石橋は冷戦構造を打ち破り、日本が架け橋となって「日中米ソ平和同盟」を主張。「日本と中国は両国民が手を携えて極東と世界の平和に貢献すべきである」との石橋・周共同声明を発表した。この声明が後に日中共同声明につながったともいわれている。その後も少数派閣ながら石橋派の領袖として影響力を持ち、自民党内ハト派の重鎮として活躍したが、1963年の総選挙で落選し、政界を引退。1973年脳梗塞のため、自宅で没す。享年88歳。

参考資料：『人物叢書 石橋湛山』姜克實著 吉川弘文館、ウィキペディア

5. 抑圧された植民地解放のために戦った人達

1943年11月、大東亜共同宣言（アジアの7各国首脳 in 東京）が出された。

アジアの植民地解放は、明治以来の多くの日本国民の願いではあったが、一方で国権の伸長という利己的なナショナリズムの欲望を満たすためのイデオロギーとして主張する者も多かった。大東亜戦争のイデオロギーについても、例えば下記①の大東亜建設審議会での委員（財界人）の発言が如実に示しているように、次元の低い本音の発想しか持てない日本人も多かったが、②の事実のようにインド、ミャンマー、インドネシア等の植民地からの独立のため、現地の人達とともに植民地からの独立の戦いに、自らの意思で参加して死んで行った多くの日本人がいたこと、彼らのことが今日でも現地で高く評価されていることは事実として記憶されるべきである。結果として戦後合計100カ国以上が国家の独立と民族自決を果たした。

- ① 財界人の鮎川義介は「大体、日本ノ戦争ノ目的ト云フモノハ、一般的ニハ大東亜共栄圏ヲ確立スルコトニナツテ居リマスケレドモ、ソノ一番本ヲナスモノハ何カト云フトキ、ヤハリ日本ノ権益ト云フモノガ一番主体ヲナサナケレバナラヌ・・・」、また津田信吾（鐘紡社長）は「結局ハ搾取ヲシテ、日本ヲ強メルコトニ帰着スル、コレハ誰デモ考ヘテ居ルコトデ、・・・」と発言した。
- ② インド国民軍と共にインド独立のために戦って死んだ士官や兵士たち、ミャンマー独立のために、アウンサンのビルマ独立義勇軍とともにイギリス軍と戦って死んだ士官や兵士たち。インドネシアでは、敗れた日本軍は、連合軍の命令により、東南アジアの各占領地域を現状維持のまま、上陸する連合軍部隊に引き渡すことになり、インドネシア人の独立派への武器引渡しも厳禁とされていた。しかし現実には旧日本軍将兵が独立軍の将兵の教育や作戦指導をするとともに、自ら戦闘に加わるなどした。日本に引き揚げずに独立派に身を投じた元日本兵は数千人に上った。

XI 世界に貢献する日本型産業の精神の源

(公益資本主義の世界展開、石田梅岩、渋沢栄一)

1. 日本型資本主義の精神の源

禪と念仏によって、専門修行者の世界から庶民全体に広がった鎌倉仏教の宗教改革は、今日の日本の産業社会を支える日本型マネジメント、企業道徳（武士道、商業道徳）、勤労の精神、ものづくり精神の土台となっている。例えば、

- ◇ 日本型マネジメント（武士・武将）
 - 末端組織の主体性を尊重する組織運営、現地現物のプラグマティズム
- ◇ ものづくり（工人）
 - 刀工、宮大工、彫刻家、工芸家等の自らを捨て対象物に「なりきる」精神は、日本製造業の「ものづくり」のベースとして近・現代産業社会で開花した。
- ◇ 三方良しの商業理念（商人）
 - 商業資本が発達した江戸期の石田梅岩の心学は今日 CSR の模範と言われる「三方よし」の商業道徳のベースとなって、世界的に注目されている。
- ◇ ボトムアップの主体的取組（農民）
 - 二宮尊徳の農民の主体的努力を導いた地域開発モデルは、今や 21 世紀の地方創生のモデルとなっている。これらの伝統は、渋沢栄一の「論語と算盤」…現在の日本型経営に繋がっている。

参考図書：寺西重郎著「日本型資本主義・その精神の源」

2. 公益資本主義の世界展開

20 世紀の後半から進展したグローバリズムは、世界のモノカルチャー化への反発、直接民主主義からの乖離への疑問、金融資本主義による貧富の格差の拡大と社会の分断、等々を背景に、世界的に見直し時期に入っている。

その中で、グローバリズムを支えた株主資本主義にも、大きな転換期がきている。

日本では、一時期すすめられた日本型経営からの脱皮、グローバル経営への転換の動きに、ここ数年、「会社は株主のもの」とする株主資本主義よりも、「会社は社会の公器であり、株主だけのものではなく、従業員、顧客、取引先、さらには地域社会や国や地球全体にプラスの貢献をする存在でなければならない」とする公益資本主義こそ、産業が向かうべき方向だとする動きが、急進展しつつある。

この日本発の流れは、公益資本主義の主唱者原丈人氏（アライアンス・フォーラム財団代表理事）の国際的な活躍により、「ウォールストリートが繁栄するためには、公益資本主義に転換すべきだ」として同氏をサポートするモルガン・スタンレーのトップの支持も得て、米国における株主資本主義の見直しの動きになり、いまや世界の潮流になりつつある勢いが出ている。

日本国内の動きは、むしろ世界の動きに遅れる形となっているが、今後、長期保有株主の重視、四半期決算の廃止、社外取締役制度の見直し、ROE経営の見直しが進むのは必至である。

公益資本主義こそ、日本のこころを裏打ちとして発展してきた日本型経営の将来の理想形でもあり、日本が世界に提案できる新しい資本主義ではなかろうか。

参考図書：原丈人著『『公益』資本主義』

3. 石田梅岩

◆ 生涯

(1) みじめな奉公人生活を体験

1685（貞享2）年、京都亀岡の百姓の次男として生誕。11歳の時に京都の商家に丁稚奉公に出て辛酸をなめた。4～5年の奉公を経て生家に帰り父のもとで農業を手伝い、独学で学問に励んだ。まもなく神道に帰依、後に儒学を学び、仏道修行をするが、神道への尊崇の態度は生涯変わらず、晩年まで、仏壇よりも神棚、寺院よりも神社の参拝を先にしている。

23歳の時、京都の呉服商、黒柳家に手代（一人前の店員）として勤務。誰よりも早起し、夜中に書を読み、主人の用命を疎かにしないという厳しい生活を自身に課したが、間もなく挫折して神経衰弱になったりもした。

(2) 心の「覚」から衆生済度の「行」へ

呉服店の経営の諸業務にも十分に体験を積んだ後、梅岩は京都の碩学の儒者のいくつかの塾の門を叩き、37～8歳の頃には儒教の中心テーマである性理の学にも通じたと自認するに至った。だが、頭の中の知的な理解では、知識を超えた人間の根本問題の会得には至らない。40歳の頃、呉服店を辞し、以後は専ら修行に明け暮れ、諸方に師を求めた。最後に小栗了雲（黄檗派の在家の禅師家）に参じて坐禅の工夫に打ち込んだ。「多年の疑念が一举に散ず」という体験を経て疑念が一举に解消した。見性を得た梅岩は、数え年45歳の時、後に石門心学と呼ばれた講演方式による教化運動に乗り出す。男女とも聴講可能、無料という講演は当時、前代未聞のことだった。とはいえ、最初は無名の人々の講釈など聞こうという人はなく、何とか2～3人、時には門人一人のみが聞き手ということもあった。

不屈の意思と凜然たる態度、そして平易でありながらも、十分な論理性をもつ教説は、やがて人々の心を捉えるようになり、京都で1カ月間連続の夜講を開いたところ、老若男女が群れをなす盛況をみたといわれる。活動を始めて10年近く経ち、提唱する商人道の運動は確実な評価を博し、この時代、数多く存在した学塾のどこよりも多数の受講者、門下生を集めるようになった。

梅岩は、人里離れて多年の修行をしないで済む方法を工夫し、指導して実を上げた。それは聴講のほか、テーマごとに討論・思索する輪講に禅的な静座法を加えた。

聴衆から謝礼を一切求めず、独身・自炊の質素な生活を生涯通した。一方貧窮者の群れや火災を知れば、率先して門弟と駆けつけ、ボランティアとして救済に務めた。

(3) 画期的な著作『都鄙問答』

講席を開いて10年目、主著『都鄙問答』の執筆に取り掛かり、翌年に公刊。次いで翌年『儉約齊家論』を出版、京・大坂の商工業者の間に大反響を呼ぶヒット作となった。究極的な内在たる「性」の哲学を、彼の禅体験に即して問答形式で精緻に叙述した絶筆『莫妄想』も執筆。そこで「道を得て道を道とせば道に非ず（孟子）」を引用。

享年60歳。身の回りには生活用品と書籍のほか、一物もなかったと伝えられている。

◆ 人と「心学」の思想

(1) 石門心学の哲学思想

① 天人合一の世界観

天地万物が自分と一体である。万物と人とはその源を同じくするとはいえ、万物は万物自体がその同じことを自覚せず、人のみがよくこれを自覚して、己の心をもって、天地の心、万物の理を推すことができる。

② 性理の形而上学

性、理、心、天、命などの概念が石田梅岩の哲学思想の中心。即ち天地の間で、万物があまねく内在する普遍的な実体を「理」と呼び、特に人間、人体に宿ったものを「性」とよぶ。心を尽くし性を知り、天を知るところに学問の至極があるとする。

③ 心性の問題

学問は「性」を知ることには始まるが、その第一歩は「心を知る」ことにあり、そして「心を得る」ことが学問の終わりである。「心学」の名称はここから生まれた。



(2) 商売と道德の融合

梅岩は長年の商家勤めから商業の本質を熟知していた。「商業の本質は交換の仲介業であり、その重要性は他の職分に何ら劣るものではない」との立場。

梅岩の思想の根幹にあるものは、商売と道德の融合である。道德のないビジネスは、自らが認められたい、自分が豪遊したいなど、終わりのない強欲主義に陥る。「どうやって儲けるのか」も必要だが、その根底には「どう生きるか」が大事であると説き、「正直」「勤勉」「儉約」、また「先も立ち、我も立つ」商いを説いた。梅岩はとりわけ儉約を説いた。その基本は「自制」であり、それが社会秩序の基礎と考えた。儉約の奨励や富の蓄積を天命の実現とみる考え方は、カルヴィン主義商業主義の日本版と解された。

(3) 現代企業のCSR, SDGsにおける意義

環境問題への意識の高まりや、企業の不祥事が続く今日、CSRの重要性が言われ

ている。そのような中で、「実の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり」とCSRの本質的な精神を表現した梅岩の思想は、近江商人の「三方よし」の思想と並んで「日本のCSRの原典」と国際的にも脚光を浴びている。

「商人道」として創始した彼の運動は、その後「心学」又は「石門心学」と一般に称された。幕末まで百数十年間にわたって、商工業者のための正統的でまた実用的な倫理の教えとして全国的に発展を続け、やがて商業ビジネスを超えて広く庶民一般の教育の上でも重要な影響をもち、国民的なモラルの形成にも深くかかわった。明治以後、心学の庶民教育としての役割の多くは、義務教育や教育勅語などによって取って代わられたが、経営の教えとしての伝統は根強く存続した。

※由井常彦著『都鄙問答 経営の道と心』（日経ビジネス人文庫）、その他

4. 渋沢栄一

日本の資本主義の父と言われる渋沢栄一は、明治大正の日本経済の黎明期に、論語と算盤、即ち道徳と経済の一致を前提とした資本主義を標榜した。

◆ 生涯

渋沢栄一（1840－1931）は明治大正期の実業家。第一国立銀行を設立したのをはじめ、商工会議所、東京証券取引所を組織し、東京海上火災保険、王子製紙、大阪紡績、東京ガスなど470社に及ぶ企業設立に深く関わって、実業界の指導的役割を果たした。「日本資本主義の父」と評される。商法講習所（現、一橋大学）、大倉商業学校（現、東京経済大学）の設立にも尽力した。渋沢は『義利両全』と、『論語と算盤』で道徳と経済が一致すべきことを説いた。

幕末、現埼玉県深谷市血洗島で藍玉の製造販売と養蚕、また米や野菜の生産も手がける豪農の家に生まれた。渋沢家は農家とはいえ原料の買い入れと販売を行うため、常に算盤をはじく商業的な才覚が求められた。5歳の頃から父の指導で読書を始め、7歳になると四書五経や日本外史を学んだ。また剣術を神道無念流大川平兵衛より学んだ。1861年21歳のとき江戸に出て儒学を海保漁村に学ぶ。また、お玉が池の千葉栄次郎道場に入門して剣術修行を始めたが、同じ門下生であった勤王の志士たちと交流を深めた。（水戸学の影響）

尊皇攘夷の思想に目覚めた渋沢は、仲間と共に高崎城を乗っ取って武器を奪い、横浜を焼き討ちにしたのち長州と連携して幕府を倒すという計画を立てるが、従兄弟の尾高長七郎の懸命の説得により中止する（1863）。

渋沢はその後交友のあった一橋家家臣平岡円四郎の推挙により一橋慶喜に仕える。慶喜が将軍となったため、1866年幕臣となった渋沢は、将軍の名代としてパリの万博博覧会に出席する徳川昭武の随員としてフランスに渡航。パリ万博を視察したほか、ヨーロッパ各国を訪問し、先進的な産業・軍備を実見し、1868年帰国した。このときの巡遊によって得た産業、商業、金融に関する知識は、後年の活動に大いに役立った。

1869年大隈重信に説得され、維新政府の大蔵省に入省。井上馨を補佐して度量衡の制定

や国立銀行条例制定などに携わる。予算編成を巡って大久保利通と対立して1973年井上馨とともに大蔵省を退官した。

退官後は実業に専念し、1873年官僚時代に設立を指導していた第一国立銀行（のちの第一勧業銀行、現・みずほ銀行）の頭取に就任。以後、七十七国立銀行、東京瓦斯、東京海上火災保険、王子製紙、田園都市（現・東急）、秩父セメント、帝国ホテル、京阪電気鉄道、東京証券取引所、麒麟麦芽、サッポロビール、東洋紡績、大日本製糖、明治製糖など、その数470に及ぶ多様多種の会社設立に深く関わり、実業界の指導的役割を果たした。

渋沢は教育・社会・文化の各方面の社会公共事業にも熱心で、二松学舎第3代舎長を務めたほか、一橋大学、東京経済大学、国士舘大学、日本女子大学、東京女学館の設立に携わった。また、聖路加国際病院初代理事長を務め、東京慈恵会、日本赤十字、癩予防協会の設立にも関わった。1926年、1927年のノーベル平和賞の候補にもなっている。1931年92歳で死去した。

◆ 人と思想

i) 道徳と経済の一致

渋沢は事業の一番の基本は道徳だと言い、『論語と算盤』で道徳と経済が一致すべきことを説いた。倫理と利益の両立を掲げ、富は全体で共有するものとして社会に還元することを説き、自分もそのように生きた。そして、「商才」とはもともと道徳を根底においており、道徳と離れた欺瞞、不道徳、権謀術数的な商才は、真の商才ではないと言う。渋沢は人を見る場合、『論語』で人を見た。そして生涯人を見誤ることはなかった。このような哲学をもつ渋沢は、三菱の岩崎弥太郎と意見が合わなかった。岩崎は1878年渋沢を隅田川の屋形船での舟遊びに誘い、一緒に手を組まないかと持ちかけた。渋沢は岩崎の個人営利主義的経営思想を批判し、口論となったことが伝えられている。両者は国家・社会あつての企業という哲学は共通していたが、事業経営の信念の違いから手を組むことはなかった。渋沢は三菱のような巨大財閥をつくることもできただろうが、合本主義を日本に広めることを使命とし、渋沢財閥はつくらなかった。渋沢は晩年「わしがもし一身一家の富むことばかり考えたら、三井や岩崎にもまけなかったろうよ。これは負け惜しみではないぞ」と子供たちに語ったと伝えられている。

ii) 並外れた合理性、先見性、プラグマティズム

渋沢栄一の生涯から顕著にみられるのは、並外れた合理性と先見性をもったプラグマティズムである。先見性はいつも何らかの合理性にもとづく判断であつて、決してイデオロギー的な信念を振り回すようなことはなかった。京都に行ったらその情報を手に入れ、自分の考え方を変えた。フランスに行ってもパリで新しい情報をどんどん手に入れる。そしてそれに基づいて今までの考え方を変えてしまう。渋沢はそうすることを信念に欠けると思っていなかった。渋沢は新しいものに対して実に柔軟性があつて、偏見をもって見るものがなかった。一方、渋沢は頑として決して変えない



一面を併せ持っていた。明治6年新政府を辞職するとき、多くの人が才を惜しんで引き留めたが彼は頑として聞かず、以後いかなることがあっても官に就き政治にタッチすることはなかった。

渋沢は伊藤博文に政党の必要性を説いた。感服した伊藤は立憲政友会をつくった。伊藤は渋沢に黨員になれと勧めたが、渋沢は断った。伊藤の非難に対して、渋沢は「自分が先に立って運動したり、実業家の立場を捨てたりはしない。私は政治の表舞台に立つ役者にならないかわりに、役者に熱心に拍手喝采を送る見物人にはなると言う意味です」と答えた。渋沢は子爵に列せられたが、どんな書生にでも会い、相手の言うことを細かく聞いた。そばにいる秘書に全部書かせ、得た情報を全部吸収した。このような態度は晩年になっても変わらなかった。

iii) 未来の指針となる渋沢栄一思想（日本型儒教の倫理とプラグマティズム）

資本主義や実業には、自分が金持ちになりたいとか、利益を増やしたいという欲望をエンジンとして前に進んでいく面がある。そのエンジンは今日の金融資本主義のようにしばしば暴走する。渋沢は実業や資本主義には暴走に歯止めをかける仕組みが必要と考え、その手段が『論語』だった。

渋沢は、パリ万国博覧会で、銀行家フリュリ・エラールと会い、サン・シモン主義にも触れたのではないかという説がある。（鹿島茂明治大学教授）

資本主義には、アダムスミス（『国富論』の著者）以来「見えざる手」で需給は調整されるとしても、市場の失敗を抑制する倫理が資本主義に必要という視点はマックス・ウェーバー（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の著者）以来、認識されていた。

サン・シモン伯爵は当時のフランス（ナポレオン三世時代）に、王侯・貴族・僧侶・軍人・官僚ではない「産業人による、産業人のための、産業人の社会」をつくる活動をすすめたが、そこに「宗教」の要素を入れ込み、人間の利己心への抑制力を加えたサン・シモン主義を標榜した。

渋沢栄一の資本主義は、江戸時代の石田梅岩の思想を経て、今日の日本型資本主義の思想に繋がり、さらに公益資本主義の議論となって、世界で受け入れられる動きとなっている。

資本主義を動かす人間のところに、渋沢の日本型儒教の倫理とプラグマティズム（実質主義、現場主義）が果たす役割は大きい。

参考図書 山本七平『渋沢栄一近代の創造』 山本七平『渋沢栄一日本経営哲学を確立した男』 鹿島茂著「渋沢栄一 算盤篇・論語篇」、『現代語訳論語と算盤』守屋淳

XII グローバル時代における日本語の大切さ

日本のこころの根源には国語がある。自国語（漢字かな交じり文）を失ってはノーベル賞も出ず日本に未来はない。国語を失った国（アラビア語と中東諸国、タガログ語とフィリピン、漢字と韓国）の悲劇、日本語喪失の恐れは？

（施光恒）

現在、英語教育の強化の方針が叫ばれ、国の教育政策の大きな柱として推進されている。政策当局者の中には「グローバリゼーションの時代、経済界の要求の重点は英語教育の強化にある」と考える向きもあるようだが、しかし、一部のグローバル企業はさておき、多くの国内企業では採用する新人の国語力の不足が著しいため、将来の企業経営に大きな危惧を感じている状況で、幼児教育・学校教育段階では、国語教育の強化への期待と懇請の声一色となっていると言っても過言ではない。

その一部、

- (1) 国家の浮沈は小学校の国語にかかっている。英語教育強化は国民のエネルギーを空費させる。英語教育論を退治しないと国語改革はできない。国語の基礎は、文法ではなく漢字である。国語力の低下は、知的活動能力の低下、論理的思考力の低下、情緒の低下、祖国愛の低下を同時に引き起こしている。国語力の低下は確実に国を滅ぼす。英語よりも国語教育の重視が先だ。（藤原正彦）
- (2) 現在のような教育の英語化が進むと、高等教育を受けてエリート的、指導的立場づくには英語は必須となる。一国の中でエリート層と一般の人たち間で使う言語が違っていたら、意思疎通が十分できず、世論がきちんと形成されない。その結果は民主主義を危うくし、社会の分断を招く。将来的には、日本語が知的なことを論じたり、研究したりする言語ではなくなってしまう。フィリピンは英語で現地語が死んだ。人間の創造性は、既存のものへの違和感や、ひらめきから出発する。そうした細やかな感覚や気づきを言語化できるのは母語だけ。創造性の土台は発達した母語にある。英語重視の改革は、日本人の創造性（イノベーションへの資質）を失わせる懸念がある。（施光恒）
- (3) 日本語の劣化が進んでいる。かつて古代ギリシャ文明をヨーロッパに中継ぎした世界四大文章語の一つであったアラビア語がその後の英仏植民地支配を経て劣化したのと同じ轍を踏みつつある。英語による世界のモノカルチャー化が進む中で、日本語の質の低下が心配だ。（愛甲次郎）
- (4) 漢字仮名交じりの日本語には高い知的伝達能力がある。自身の経験でも、ロシア文学を日本語の翻訳書で読んだ場合は、現地の人が現地語で読んだ場合に比べ2倍ほど早く読める。（和田裕）
- (5) いまはスマホで通訳不要の時代になった。自分の長い海外経験から、英語は方便で、

大事なものは英語ではなく、日本語であると考えている。仕事ができる者は英語が使える者ではなく、きちんと日本語で考える能力を持った者だ。信頼する企業経営者も、海外で勤務する人間の選抜基準は、日本語で仕事をしっかりしている者だと言う。(高坂節三)

- (6) 日本語の破壊が、職人の文化、モノづくりの現場を破壊している。最近の新人は自分の頭で整理してモノを考えたことが殆ど無いので、満足に自己紹介もできない。採用して企業内で教育を施す余地がない。将来の日本産業の競争力を考えると、これは大変な事態だ。(伴紀子)
- (7) 西欧では、知的概念を凝縮した抽象語としてラテン語やギリシャ語がつかわれる。日本人にとっては概念を集約する表意文字の漢字が大切で、漢字仮名交じり文は国力の源である。
- (8) サイエンスの分野の術語は全て適切な漢字(日本語)に翻訳すべきだ。そうしないと知識のすそ野が広がらない。中国は日本の明治時代のように、最近はどんどん英語を漢字(繁体字)に翻訳している。中国の「英漢科学技術語辞典」は、英語に対応する用語は全て漢字(繁体字)を充てている。科学技術に興味をもつ膨大な若者層が育つ背景となっている。明治の日本人は、水素、酸素など、全て外来語を漢字に翻訳し、全国民が理解できる環境をつくった。今中国が将来を見据え懸命に努力しており、日本の教育・研究界は危機感を抱くべきではないか。専門家は英語で問題ないが日中で国民の科学力に大きな差が出る恐れが大きい。(野依良治) ※

※野依先生は、さらに次のように主張されている。

(科学技術振興機構研究開発閃絡センター2019年3月18日記事より)

論理思考の根幹は母語である。今日、自然科学や技術の論文の9割以上が英語で書かれているので、研究者には情報収集、論文執筆、他国の研究者と会話する英語能力が必要だ。しかしわが国では通常人の場合と同様、科学技術社会でも英語はあくまで道具であって、「日本語こそが精神」である。だから高い知的伝達能力をもつ「正統な漢字仮名交じり文」の充実が求められる。逆に母語の大切さがわからぬ人が本物の外国語を習得することは至難である。多数の非英米人が集う国際的会合の公用語が、broken English(不完全英語)もしくはGlobish(全世界語として通じる英語)であるのは当然で、正統な英米語だけが飛び交うのは、むしろ広がりや活動を欠く活動分野である。



- (9) AI時代では新しい価値を生み出すイノベーションが求められるが、そこでは論理や知識だけでなく、ひらめきをもたらす情緒や感性、直観力が重要とされる。日本語で書かれた文学の重要性もまた再認識されなければならない。

VIII 世界に求められる日本型リベラルアーツ

ここ10年の間に日本の大学の世界ランキングは低下の一途をたどっており、日本の高等教育に対する世界の評価が低下している。大学の評価には、資金力、研究力の評価も含まれるが、教育力の評価も大きな比重を占めている。その教育力の評価が高い大学は、例外なく、リベラルアーツを重視している。

ビジネス界において、イノベーションの可能性を引き出すうえで、リベラルアーツ教育の重要性が重視されてきたこととも関連する。

現代が直面する人材養成の大きな問題は、一つには、エリートと大衆の対立、相互不信の問題がある。トランプ人気は、アメリカの知的エリートたちへの大きな反発が底流になっていると思われる。

二つ目の問題としては、感性教育の軽視、三つには、身体を使う肉体的作業への蔑視がある。

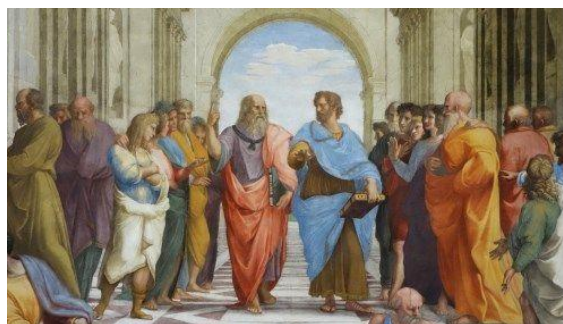
現代アメリカでは、これらの問題の放置が、皮肉にも最先端のテクノロジーの展開に阻害要因となることが明らかになり、音楽教育、社会での現場教育が重視され、コミュニティ・ベースト・ラーニング、長期インターンシップ（コープ・プログラム等）、音楽教育のさらなる導入等が真剣に議論され、大胆な改革への取り組みは始まったばかりと言える。

欧米のリベラル・アーツ教育も大きな限界に突き当たっている。

一方、日本では、一部の私学系の取り組みは別にして、このような動きは国立系では全く皆無であり、ますます世界の潮流からはずれてきている。日本の大学では、研究費の削減に対する抗議とそれへの対応は大きな話題となっているが、肝心の根本的な教育改革、とくにリベラルアーツ改革には、本格的な取り組みもなく、関心が払われていない。

さらに、日本では歴史的に、西洋古典と東洋古典（日本思想）の交流から和・漢・洋のバランスのとれた教養が形成され、日本人の精神構造が育まれてきた面があったが、理系教育重視、文系教育軽視の流れの中で、和・漢・洋の文学、古典を総合的に学ぶ、日本型のリベラルアーツ教育も衰退し、このままでは日本の大学は世界から完全に見放されることになりかねない。

このような中で、岡山大学荒木勝名誉教授（西洋政治思想史、ギリシャ哲学）が、2018年10月に「東京逍遙塾」を開設し、日本型リベラルアーツの研究・教育拠点の再構築の試みをスタートされた。これまでの東京逍遙塾の成果を踏まえ、日本の知的伝統を生かした今後の日本型リベラルアーツ



のありかたについて検討して見る必要がある。東京逍遙塾で示された下記の今後の展望について、どのように考えるべきか、あらに検討が深まることが期待される。

今後の展望

- ◆ アリストテレス哲学の中に、東洋哲学との近似を見て、中国の大学は、紀元前のアリストテレスと孔子の思想的交流※にまで遡り、独自の政治哲学を求める時代に入っている。

※東北師範大学の校門にアリストテレスと孔子が対話する巨像がある



- ◆ 西洋社会が畏敬する東洋社会へ、鍵のない社会か・AI 監視網の中の社会かの選択、アジア諸国や日中韓三国は共通善の哲学やビジョンをどのような形で、展望しうるのか。
- ◆ 神・仏・儒習合の精神基盤をもつ日本としては、近代西洋との間だけではなく、古代ギリシャ（アリストテレス）等との対話を通じて、どのようなビジョンが画けるのか。



長い戦乱と自然災害の歴史を経て練り上げてきた日本のこころ、具体的には禅、仏教、儒教、神道などとも混然一体となった「日本のこころ」（そして、それは古代以来、ギリシャから東洋までの人類共通の智慧をベースとした普遍性をもったもの）を学び直し、そこを立脚点とする日本の夢＝「人類社会のための新たな希望のビジョン」を再構築し、それを世界に、静かに発信していく時期に来ているのではないか。

西田幾多郎や中村元を生んだ東洋哲学の蓄積一つとって見ても、その後の日本の高等教育・研究機関に如何にそれらが継承されているかは心細い限りである。

日本としては、AI時代への対応に理系学問の研究・教育の重視が進んでいるが、その陰で文系学問が軽視されることがあってはならない。

古典哲学をはじめ、文学から音楽など、総合的な日本型リベラルアーツが、いかなる科目の総合の上に、築かれて行くべきであろうか？

荒木先生の考えは、世界にも例のない日本独自のリベラルアーツというモデルを作っていくという構想である。例えば、日本には長い間、儒教の伝統があり、その儒教教育の中でも二つの伝統があった。一つは礼学、もう一つは楽（音楽）だ。論語の中で今日、非常に重要視されるべきはこの楽だ。「子曰く、詩三百、一言以て之を蔽えば、曰く、思い邪無し」（為政2）、「子曰く、詩に興り、礼に立ち、楽に成る」（泰伯8）、詩を朗読し、感動し、礼を学び、音楽における調和した感性を身に着け、心身ともに完成の域に達する。中国の科擧の大きな試験場があった南京には、今でも古代の音楽を体感させる施設がある。科擧における選抜の一つのジャンルとして学があったわけで、音楽「詩経」等を色々な楽器を

使って奏でる。こうした音楽重視の教育によって、中国では、統治の現場を担う官僚、士大夫が育成されえきた。韓国、日本もそのような伝統を引き継いでいて、ある意味で、東洋のリベラルアーツの重要な部分は音楽といっても良い。

勿論、音楽教育は西洋のリベラルアーツの根幹にもなっている。アリストテレスの「政治学」は、西洋における政治哲学の古典であるが、その最後の第8巻は音楽教育論である。日本が欧米から大学教育を導入した時、このリベラルアーツとしての音楽教育だけは継承しなかったといっても良い。また同時に古来からの儒教的な音楽教育も継承しなかった。

さらに、東洋の伝統には「大学」に入る前に身につけなければならないものとして「小学」がある。これは灑掃・応対・進退、礼・楽・射・御・書・数・であり（「大学章句序」）。とくにここでは灑掃と応対・進退と礼・楽に注目したい。どのような人間に対しても、自らの心を純にして、相手の心をよく理解し、礼儀正しい態度を取らなければならないとされ、そのために音楽と併せ、自ら身体的に他者を理解するように努めなければならないとされた。

この小学の重要な意味については、「論語」（子張 12）で灑掃・応対・進退の重要な意味について孔子の弟子たちでの論争が紹介されている。その箇所にもまた、朱子が程子の言葉を引用して、次のような注釈を施している。「掃除や応接の礼儀作法は、実は形而上学である。これは理には大小の差がないからである。」

この小学的な部分こそ欧米のリベラルアーツ教育に欠落しているものではないかと思われる。欧米の場合、中級以上の市民階級は、伝統的に自分が住んでいる所の掃除をサーバントにさせる。おそらく歴史的に奴隷制という大きな仕組みの下、低度な肉体的技術・奉仕は、奴隷的労働と見なされてきたのであろう。

しかし東洋の伝統では、そうではなく自ら、掃除を行うということをエリート教育の中に入れてきた。この灑・楽を現代的な形に見直して、リベラルアーツを構築することができれば、ヨーロッパやアメリカに対して独自のリベラルアーツ教育を示すことができるのではないか。

他方、欧米の政治・倫理学の根幹をつくったと言われているアリストテレスの「政治学」の中には、優れた統治エリートを作り出すための指針として、「よく統治される者がよく統治する」という言葉がある。人の上に立つ人間は自分自身が統治されることを通じてしか統治できない。被統治者としての体験が統治者としての知恵になるという。また「ニコマコス倫理学」に「人が奴隷である限り、彼に対する仁愛は存在しないが、彼が人間である限り、彼に対する仁愛はありうる。なぜなら、人は誰でも、誰に対しても、彼が法と契約とを共有しうる限り、そこに何らかの正が存在していると思われるからである。したがって、彼が人間である限り、そこに仁愛が存在するのである。」

これがアリストテレスのメッセージだとすれば、「論語」の小学、大学の教育論とアリストテレスの教育論にはかなりの程度、重なり合う部分があるといっても良い。これが、今後人類が継承すべき、自由な心をもつ人間の学問ではないか。

このように考えていけば、あるいは東西の対立を乗り越えていくような問題提起に結び付いていくのではないかと考えられ、アリストテレスと孔子を対話させるという日本の試みは、世界的に見ても重要な問題提起になるのかもしれない。

以上のような構想も含め、和・漢（印・アラブ）・洋の古典等を総合的に学べる日本型リベラルアーツの再構築を目指す「東京逍遥塾」の活動の一つの着地点として、将来日本に人材育成も含めたアジア発の人類文化の交流と発展を目指す教育・研究センターとしての「アジア・世界文化研究所」※の創設を検討することが必要ではないか？

※ アジア・世界文化研究所の構想について

1. 欧州においては、Brexit 等政治経済できしむ EU や、あらたな東西対立の兆しもある NATO の存在とは別に、ヨーロッパ評議会（Council of Europe）が、法の支配や人権、文化的協力や共通教育の面で、問題の英国、トルコ、ロシア、東欧等を含む 47 か国をメンバーとして維持しながら、重層的に存在していることは、欧州のゆるやかな統合を求める重石として、その意味は極めて大きいと考えられる。
2. ストラスブールに本部を置き、ギリシャを設立国として位置づける欧州協議会は、その思想的組織基盤を支える古代ギリシャ文化の存在がキーファクターのようにも考えられる。
3. 一方、日中韓には三国協力フォーラムがあるが、各国の外務当局が事務局を形成しているため、表層的な外交問題（国益の対立）の影響を受けがちになっていないか。文学・哲学・古典・美術・芸術等の文化・社会・生活の分野を中心に、人類社会の共存共栄をテーマとする、長期的に息の長い三国関係の重石になる組織としては、各国の学生を含む若い世代が交流・参加する、民間組織（大学、学界、産業界）が主体となることが求められるのではないか。東京逍遥塾で推奨する日本における和・漢・印・洋の古典研究や、三国協力フォーラムですすめられてきた日中韓共通漢字プロジェクト、人材育成なども視野に入れて、「アジア・世界文化研究所（仮称）」のような国際機関が設置されることが期待される。

XIV 人工知能 (AI) の時代と人間力

1. 人間のこころは生命現象であり、機械学習ではのり越えることが出来ないもの（直観力、感性、・・・）がある？

人間の頭脳には、知識の記憶と計算だけでなく、そこから新しい価値を生み出す感性、創造力が備わっている。人間は脳の神経系統のネットワークだけで説明しきれない無限の力を持っている。

人工知能が人間の能力を超える時点であるシンギュラリティ（技術的特異点）が近づいているという近未来予測は、人々の心に不安の影を投げかけている。

科学専門家である松尾豊氏は著書の中で、「人工知能が開く世界は、決してバラ色の未来でもないし、決して暗黒の未来でもない。人工知能の技術は着々と進展し、少しずつ世界を豊かにしていく。人間は知能の他に生命とこころを有している。知能をつくることが出来ても、生命をつくることは非常に難しい。人間のこころと同等以上のこころを持つ人工知能を作ることも難しい。しかし、人工知能は『特徴表現学習』（ディープ・ラーニング）により、多くの分野で人間を超えるかもしれない。人工知能が人間を征服する心配はないが、人間の尊厳を犯す可能性はあり、それに対する備えは必要だ。専門家だけでなく社会全体として、人間としての倫理観をもって、技術開発の今後のルールを作りこれに備えて行かなければならない。」としている。

禅の哲理である「色即是空」の視点から見ると、「色」は実在する（有る）現実という枠の中の世界であって、「色」（有）の世界の産物である人工知能は、与えられた枠の中の外にある「空」（無）の世界は理解できないのではないか。したがって、その発達、計算速度がいかにも上昇しても、人間のこころを超えることは、将来においても困難ではないか。

参考：「マンガでわかる禅の智慧」（日本能率協会マネジメントセンター）「人工頭脳は人間を超えるか：松尾豊」（KADOKAWA）

新しい価値を生み出すイノベーションに必要な人間力とは？ 知識や論理（ロゴス）力を育てる坐学だけでなく、実践智と感性・直観力を育てる体験学習が不可欠

参考：「パワー・オブ・クリエイティビティ：ケン・ロビンソン」（日経BP）、「AIに負けない子供を育てる：新井紀子」（東洋経済）

2. ロゴスだけの国は亡びる

いま、世界の教育界が注目しているのは、英国の教育思想家ケン・ロビンソンの警告だ。同氏は、学校教育が標準化されすぎ、子供達の「創造性を殺し



てしまっている」と主張し、世界の教育界に大きな影響を与え始めている。世界中の教育関係者が着目して、欧米諸国に限らず第三世界例えばシンガポールなどでも、いち早くロビンソンのアドバイスで、若者の声をバックにした改革が進んでいると聞く。未だに明治以来の学校教育制度の殻を破れない日本は、その教育の優れた面を残しながらも、AI時代の人材に不可欠の「創造性を育てる」という一点で、世界の潮流に完全に遅れていると言えないか。

ロビンソン氏が指摘するのは、学校教育による子供の脳神経細胞の偏った「刈りこみ」という問題だ。同氏の考えを敷衍すると次のようなことがいえる。

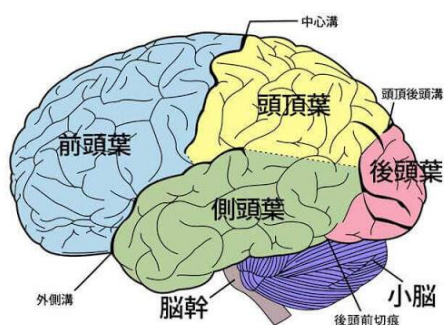
人間は少数の強い細胞を育てるだけでなく、赤ん坊のときの豊かな脳細胞のつながりができるだけ生かし、多様な脳細胞の並行的な育成が必要だ。そのつながりのおかげで脳のあらゆる部位はシステムとして同時に働いている。生まれた赤ん坊の脳の各神経細胞のつながりは、成長と共に刈りこみが行われ、少数の強いものだけが残る。成人（10歳代）の脳になると、脳神経のつながりは赤ん坊の時の20分の1（5%）まで刈りこまれてしまい、生きていくために必要な神経だけが強く残る。

とくに近年、世界の教育界において、例えばPISAランキングや、国内外での統一テスト（日本では共通テスト）で、教育の目標や価値基準が標準化され、それに従って学科ごとの教育プログラムが組まれるため、子供達の脳神経細胞は、テストに強い論理脳の発達に偏った構造になっている。学校での学習が、坐学とペーパーテストだけでしか行われないと、運動神経や、感性、直観力等を発揮させる細胞のつながりが発達せず、人間能力は歪になる。OECDの所謂PISAテストという形で、学生・生徒の能力判定の標準化が進んでおり、その影響で世界的に学校教育が歪な人間の育てる弊害が出てきているのではないか。

スウェーデンでは、坐学偏重の教育では、新しい価値を創造するイノベーターは育たないと考え、アウトドア教育（野外教育）が必須だとして、幼児教育段階から導入している。

ロゴス（論理）だけの国は滅びるというギリシャの格言があるという。パトスやエロス（愛）を忘れてはならない。論理だけを教える教育でなく、音楽や絵画の鑑賞、天文や自然、宗教や哲学をも考える、幅広いリベラルアーツ教育が必要な所以である。

※脳の機能についての基礎知識



人間の脳は、1.2～1.4kgとノートパソコン程度の重さで、体重の2%である。千数百億個の細胞からなり、消費エネルギーは20w、血流の20%は脳で使用される。脳の構造は、①反射脳（脳幹、小脳）、②情動脳（大脳縁辺系）、③人間脳・論理脳（大脳皮質）からなるが、神経細胞が張り巡らされ、あらゆる構造がシステムとして同時に働いている。「情動」は無意識の行動であり、意識した

結果としての「感情」とは異なる。意思決定も、無意識の内になされるそれ（システムⅠ型意思決定）と、意識された（論理や理性を踏まえ）それ（システムⅡ型意思決定）があるが、前者は後者より5倍以上速いスピードでなされる。無意識でなされる意思決定には、三つの悪魔のバイアス（悪魔の自分、天使の自分、評論家の自分）がかかるので、注意が必要。脳の使用可能エネルギーは、極めて少ないので、脳は飽きやすく、疲れやすく、直ぐ眠くなる。脳を休ませる、省エネ型で使うことが極めて重要で、睡眠やマインドフルネス（坐禅）はリフレッシュのために極めて重要。

（以上は、脳科学研究の産業応用を進めるNTTデータ経営研究所の萩原一平氏が著した「仕事脳の使い方（脳科学の研究からわかった潜在能力の高め方）」（日本能率協会マネジメントセンター）等からの引用と意識）

3. 頭頂葉に情緒の素を育てる

世界的な数学者、岡潔氏（1901 - 1978年）は、教育について、東洋的な情操・情緒を大切にすることで「分別智と無差別智の働きによる（総合的な）智」を身につけるべきだと提唱した。さらに「現代日本は自他弁別本能・理性主義・合理主義・物質主義などにより汚染されている」と警鐘を鳴らし、「これを『無明』と位置づけ、心の彩りを神代調に戻し生命の喜びを感じることで克服すべきと主張した。（ウィキペディア）

岡潔氏は、大脳生理学の視点から、とくに脳の機能を次のように位置づけた。

大脳「前頭葉」は、人間の活動を支える知識（情緒・感性を含む）が蓄えられるところで、その発育は10歳以後から本格化する。その前頭葉に蓄えられる知識に、情緒のエキス（素）を供給するのが「頭頂葉」の火であり、そのエキス（情緒の素）は、童心の季節（生後3か月）に出来始め、小学生6年（中3まで延長できる）が本格的な「情緒の芽生えの季節」になる。吉田松陰は、この時期に自分の烈々たる気迫を弟子たちの頭頂葉に植え付けることに成功した。頭頂葉の火（こころの奥底にある第九識《唯識では第八識の阿頼耶識》）は、仏教では「無差別智」という。一方、3年保育の幼児教育の時代が「自我発現の季節」となる。この時期は、前頭葉が形成されるとともに、頭頂葉も発達する。本能は小我を意識し、頭頂葉は真我を意識する。この時期には、本能を抑止する訓練（しつけ）も必要であるが、真我を育てる親の愛情が不可欠である。「側頭葉」は知覚、記憶、機械的判断を司る。学習塾による機械的な知識の提供だけでは、側頭葉の機械的判断ばかり強化され、「昆虫のような人間」を育てることになる。いずれにせよ、子供に接する教師や親の子供への愛情と導きが極めて重要である。



以上は、岡潔の「教育の原理」（1968年文部大臣あての提言書）の一部分の趣旨を引用。

XV これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）

米国の夢（アメリカ・ファースト）、中国の夢（民族の復興）等、世界中が自国第一主義を夢として掲げ、軍事・経済覇権の追求に奔走し始めている。人類はこれらの夢を超克する新しい世界ビジョンを考える時期に来ているが、提示されるべき日本の夢（ビジョン）はどのようなものなのか？

グローバリズムとナショナリズムの対立、宗教の相違による対立、一国覇権主義と多国間主義の相克、経済における自由と管理・規制のバランスの喪失、富の集中と格差の拡大等々で混乱する世界に、世界や日本の歴史、祖先の残した智慧を踏まえ、私達はどのような夢（ビジョン）を提示することができるのか。

世界情勢の緊迫で、平和ぼけと言われるほど性善説に立っていた日本の安全保障政策等も、一転して性悪説に基づく国際標準並みの施策への転換が求められている。亡国のリスクを避け日本が生き延びるためにしっかりした防衛力を整備することは、必要不可欠の選択であろう。

日本はしかし、本来の性善説に根ざす、人間観・世界観を骨格に据え、性善・性悪の間でバランスのとれた国家ビジョンを保持する必要がある。

生命体の人間にとって、自己の生存と発展は本能的に正しい目標である。その場合、性悪説の人間観では、自己利益のみを最大限に追求することになるが、一方で、性善説の人間観では、私益よりも公益を、自己愛よりも博愛を、国益と共に地球益を追求する力が強くなる。

「日本のこころ」は、過去1000年に及ぶ自然災害と戦乱の世を経て、万民の間で、性悪説に偏り過ぎることなく、性善説を適正に位置づけるバランスのとれた人間観・世界観として熟成されてきたといえる。日本のこころの性善説に根ざす人間観は、中国やインド、さらにはギリシャ哲学や多神教の原始キリスト教、西洋哲学の一部にもつながる人類的普遍性を有するものでもある。

日本の新しい世代がこのような日本のこころを土台とし、将来の地球・人類を救う新構想のビジョンを、日本の夢として新たに構築し打ち出していくべき時期にきているのではないか。

この資料は、一般社団法人世界のための日本のこころセンターが、顧問や会員相互の意見交換を踏まえて、アドバイザーのご意見やご示唆を頂いて、作成したものです。

今後、多くの関心を持つ方々と意見交換を進めることを前提に、急いで作成した概要版（第一版）であり、整理も乱雑で、精粗もそろっていない内容ですが、今年 1 年をかけて研究会（第一期自啓共創塾）をスタートさせて検討し、その中での意見交換等を通じて、さらに充実したものを、次版として作成できるよう努めて参りたいと考えております。

作成分担は、以下の通りです。

監修 土居征夫

素稿執筆 土居征夫、根本英明、松本亮太、神田淳

アドバイザー

- 田村哲夫 渋谷教育学園理事長
- 荒木 勝 岡山大学名誉教授・東京逍遥塾塾長
- 月尾嘉男 東京大学名誉教授
- 施 光恒 九州大学大学院教授
- 原 丈人 アライアンスフォーラム財団代表理事
- 水田宗子 国際メディア・女性文化研究所理事長
- 近藤誠一 TAKUMI Art du Japon 代表理事 元文化庁長官
- 降旗洋平 日本信号株式会社社長
- 尾崎 哲 野村アセットマネジメント会長
- 村上孝憲 エコッツエリア協会専務理事
- 古橋和好 ウェルビーイング研究所代表
- 露木順一 元日本大学教授 元開成町長
- 杉山呼龍 人間禅師家・禅フロンティア主管
- 栗原康剛 株式会社テクノアソシエーツ社長
- 飯倉 竜 Japan Culture and Technology 株式会社代表取締役
- 上本洋子 自在株式会社
- 神田 淳 高知工科大学客員教授

原稿作成にご協力頂き、発言等を掲載させて頂いた方々については、文中にお名前を記載させて頂きました。

発行元	一般社団法人世界のための日本のこころセンター
連絡先	〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 1-8-7 東信室町ビル 5 F
	URL https://www.jpkokoro.com/
	E-mail jpkokoroinfo@gmail.com
頒 価	1,000 円